

柏北部中央地区 埋蔵文化財調査報告書 6

—柏市大割遺跡・農協前遺跡—
縄文時代以降編

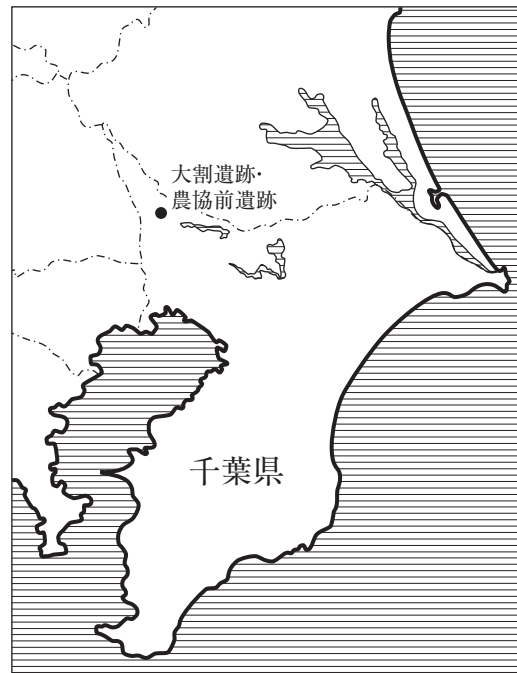
平成 27年 3月

千葉県教育委員会

柏北部中央地区 埋蔵文化財調査報告書 6

かしわし おおわり いせき のうきょうまえ いせき
— 柏市大割遺跡・農協前遺跡 —

縄文時代以降編



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの業務内容に加え、平成 25 年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 6 集として、千葉県県土整備部による柏北部中央地区土地区画整理事業（公共つくばエクスプレス沿線整備事業）に伴って実施した柏市大割遺跡及び同市農協前遺跡の調査報告書（縄文時代以降編）です。調査成果としては、縄文時代前期の竪穴住居跡や早期の炉穴・陥穴、平安時代の土坑などが検出できました。周辺の調査事例と合わせ、この地域の歴史を知る上での貴重な成果を加えることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

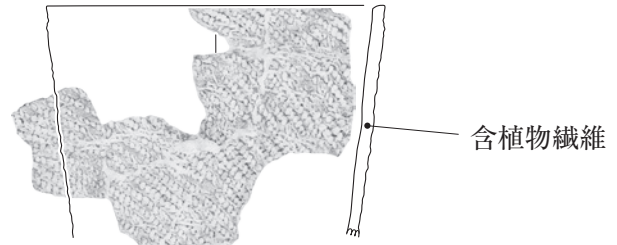
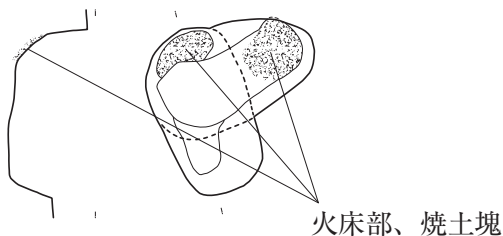
最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

千葉県教育委員会
文化財課長 永沼 律朗

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による公共つくばエクスプレス沿線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県柏市若柴字大割 227 - 1 ほかに所在する大割遺跡（遺跡コード 217 - 027）、及び千葉県柏市大室字正連寺前 257 - 11 ほかに所在する農協前遺跡（217 - 034）である。
- 3 発掘調査は、千葉県県土整備部の委託を受けて公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、整理作業から報告書作成に係る作業は、千葉県教育庁文化財課が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の実施期間及び担当者については、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、山田貴久・落合章雄が担当した。
- 6 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
 - 第 1 図 国土地理院発行 1/25,000 数値地図「流山」[N 1 - 54 - 25 - 1 - 2] (平成 22 年 8 月発行)
 - 第 2 図 地図史料編纂会編 明治前期 関東平野地誌図集成 1/25,000 「流山」
 - 第 4 図 柏市都市計画課 1/2,500 都市地形図「11・17」(平成 5 年 3 月修正測量) を 1/10,000 に縮小して使用
 - 第 6・20 図 千葉県県土整備部 1/1,000 地形図「7・8・10」(平成 9 年測量) (第 6 図は 1/2,500 に縮小して使用)
- 7 遺跡周辺の空中写真（図版 1）は、京葉測量株式会社が平成 20 年 2 月 1 日に撮影した [2008C - C35 - 19] を約 1/8,000 に拡大して使用した。
- 8 本書で使用した座標は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北を示す。
- 9 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部市街地整備課、同流山区画整理事務所、柏市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財団ほか、多くの機関、多くの方々から御指導・御協力を得た。記して感謝いたします。
- 10 遺構平面・断面図、遺物実測図で説明が必要なものは以下に示した。



本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の方法	4
第2節 遺跡の位置と環境	6
1. 遺跡の位置と地形	6
2. 周辺の主な遺跡	6
第2章 大割遺跡	11
第1節 調査の概要	11
第2節 遺構と出土遺物	13
1. 竪穴住居跡	13
2. 土坑	13
3. 炉穴	16
4. 陥穴	20
第3節 トレンチ及びグリッド出土の遺物	24
1. 縄文土器	24
2. 土器片錘・土製品	27
3. 縄文時代石器	27
4. 奈良・平安時代土師器	29
5. 銭貨	30
6. 旧石器時代石器	30
第3章 農協前遺跡	32
第1節 調査の概要	32
第2節 遺構と出土遺物	32
1. 竪穴住居跡	32
第3節 トレンチ及びグリッド出土の遺物	36
1. 縄文土器	36
2. 縄文時代石器	37
3. 銭貨	37
第4章 まとめ	38
第1節 大割遺跡	38
第2節 農協前遺跡	41
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	遺跡位置と周辺遺跡 (S=1/25,000) ……	2	第14図	グリッド出土土器 (2) ……	26
第2図	迅速測図 (S=1/25,000) ……	3	第15図	グリッド出土土製品 ……	27
第3図	グリッド模式図 ……	5	第16図	グリッド出土縄文時代石器 ……	28
第4図	柏北部中央地区 遺跡位置図 (S=1/10,000) ……	7	第17図	グリッド出土土師器 ……	29
大割遺跡			第18図	グリッド出土銭貨 ……	30
第5図	年次別調査範囲とトレンチ配置図 ……	12	第19図	グリッド出土旧石器時代石器 ……	31
第6図	遺構配置図 (S=1/2,500) ……	14	農協前遺跡		
第7図	(6) SI001 と出土遺物 ……	15	第20図	トレンチと遺構配置図 (S=1/1,000) ……	33
第8図	土坑 ……	16	第21図	SI001 (1) ……	34
第9図	炉穴 (1) ……	17	第22図	SI001 (2) ……	35
第10図	炉穴 (2) ……	19	第23図	グリッド出土遺物 ……	37
第11図	陥穴 (1) ……	21	第24図	時期分類による出土位置 (1) ……	39
第12図	陥穴 (2) ……	23	第25図	時期分類による出土位置 (2) ……	40
第13図	グリッド出土土器 (1) ……	25			

表目次

第1表	大割遺跡発掘調査歴 ……	1	第7表	大割遺跡縄文時代石器属性表 ……	29
第2表	農協前遺跡発掘調査歴 ……	1	第8表	大割遺跡出土銭貨計測表 ……	30
第3表	整理作業実施期間 ……	4	第9表	大割遺跡旧石器時代石器属性表 ……	31
第4表	周辺遺跡 (1) ……	8	農協前遺跡		
第5表	周辺遺跡 (2) ……	9	第10表	農協前遺跡出土銭貨計測表 ……	37
大割遺跡					
第6表	大割遺跡遺構一覧 ……	11			

図版目次

図版1	遺跡周辺空中写真 (S=約 1/8,000)	図版6	出土遺物 (1)
大割遺跡		図版7	出土遺物 (2)
図版2	調査前近景・調査風景	図版8	出土遺物 (3)
図版3	(6) SI001	農協前遺跡	
図版4	土坑・炉穴	図版9	調査前近景・トレンチ・SI001
図版5	陥穴	図版10	出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経緯（第1～3表）

千葉県企業庁は、つくばエクスプレス（旧・常磐新線）の建設に関連して柏北部中央地区土地区画整理事業を計画し、事業の実施に先立って「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会教育長あてに提出した。千葉県教育委員会は、事業予定地内に9か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認し、その旨回答した（第4図）。

その後、千葉県県土整備部と千葉県教育委員会は、事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて慎重な協議を重ね、可能な限り緑地として現状保存を図る一方で、現状保存及び計画変更が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとした。記録保存のための発掘調査は、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施することになり、千葉県県土整備部との間に委託契約が締結されて、平成9年度より

第1表 大割遺跡発掘調査歴（公益財団法人千葉県教育振興財団による）

年度	調査次	対象面積 (㎡)	確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)		調査期間	調査部長 (～H17) 調査研究部長 (H18～)	調査事務所長 (西部調査事務所)	調査担当者
			上層	下層	上層	下層				
H13	(1)	1,200	126	24	0	0	H13.4.5 ～ H13.4.27	佐久間 豊	田坂 浩	副 所 長 川島利道 研 究 員 中道俊一
	(2)	2,385	240	156	0	0	H13.5.15 ～ H13.6.28			研 究 員 中道俊一
	(3)	3,060	306	120	0	0	H13.12.3 ～ H14.1.31			上席研究員 森本和男
	(4)	7,690	780	316	0	0	H14.2.1 ～ H14.3.29			上席研究員 森本和男
	(5)	1,000	118	40	0	0	H14.3.1 ～ H14.3.29			上席研究員 立石圭一
	(6)	14,650	1,465	586	-	-	H14.3.1 ～ H14.3.29			上席研究員 大椰一実
H14	(6)	(14,650)	-	-	535	216	H14.4.8 ～ H14.4.30	齋木 勝	田坂 浩	上席研究員 久高将勝
	(7)	13,800	1,480	544	0	815	H14.6.3 ～ H14.8.30			上席研究員 久高将勝
	(8)	16,500	1,658	716	0	1,013	H14.7.1 ～ H15.1.31			上席研究員 久高将勝・谷鹿栄一 横山昌彦・落合章雄
	(9)	15,370	1,702	751	0	1,885	H14.7.1 ～ H14.11.8			副 所 長 川島利道 上席研究員 谷鹿栄一
	(10)	37,220	3,720	1,666	0	2,159	H14.9.17 ～ H15.2.27			副 所 長 川島利道 上席研究員 久高将勝・横山昌彦
	(11)	5,845	618	259	0	560	H15.1.8 ～ H15.3.10			上席研究員 久高将勝
	(12)	6,500	657	260	0	560	H15.2.3 ～ H15.3.27			上席研究員 落合章雄
H17	(13)	25,000	2,500	1,280	0	1,348	H17.11.1 ～ H18.3.27	矢戸三男	田坂 浩	上席研究員 榊原弘二・沖松信隆 中道俊一
H18	(14)	16,900	1,690	-	-	-	H19.2.27 ～ H19.3.22	矢戸三男	田坂 浩	上席研究員 土屋潤一郎・豊田秀治 石川 誠
	(15)	11,150	834	268	0	170	H18.8.9 ～ H18.11.10			上席研究員 土屋潤一郎
H19	(14)	(16,900)	-	796	-	-	H19.4.6 ～ H19.5.30	矢戸三男	及川淳一	主席研究員 川島利道
	(14)-2	(16,900)	-	-	-	2,086	H19.6.1 ～ H19.8.10			主席研究員 川島利道
計		178,270	17,894	7,782	535	10,812				

第2表 農協前遺跡発掘調査歴（公益財団法人千葉県教育振興財団による）

年度	調査次	対象面積 (㎡)	確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)		調査期間	調査部長 (～H17) 調査研究部長 (H18～)	調査事務所長 (西部調査事務所)	調査担当者
			上層	下層	上層	下層				
H14	(1)	6,730	850	272	0	1,468	H14.4.8 ～ H14.6.27	齋木 勝	田坂 浩	上席研究員 落合章雄



- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1. 大割遺跡 | 30. 聖人塚遺跡 |
| 2. 農協前遺跡 | 31. 元割遺跡 |
| 3. 北花崎遺跡 | 32. 出山遺跡 |
| 4. 屋敷内遺跡 | 33. 稲荷山遺跡 |
| 5. 内山遺跡 | 34. 小川向遺跡 |
| 6. 須賀井遺跡 | 35. 川津台遺跡 |
| 7. 原山遺跡 | 36. 大山遺跡 |
| 8. 溜井台遺跡 | 37. 正連寺貝塚 |
| 9. 翁原遺跡 | 38. 北花崎遺跡 |
| 10. 駒形遺跡 | 39. 田中小遺跡 |
| 11. 富士見遺跡 | 40. 尾井戸 (I) 遺跡 |
| 12. 大松遺跡 | 41. 尾井戸 (II) 遺跡 |
| 13. 原畑遺跡 | 42. 寺前遺跡 |
| 14. 小山台遺跡 | 43. 原 (I) 遺跡 |
| 15. 寺下前遺跡 | 44. 原 (II) 遺跡 |
| 16. 宮前遺跡 | 45. 三畝割遺跡 |
| 17. 八反目台遺跡 | 46. 塩辛遺跡 |
| 18. 花前 (I) 遺跡 | 47. 上前留遺跡 |
| 19. 花前 (II) 遺跡 | 48. 香取神社遺跡 |
| 20. 花前 (III) 遺跡 | 49. 宿連寺遺跡 |
| 21. 矢船 (I) 遺跡 | 50. 鴻ノ巣 (II) 遺跡 |
| 22. 矢船 (II) 遺跡 | 51. 南原遺跡 |
| 23. 館林 (II) 遺跡 | 52. 八幡遺跡 |
| 24. 館林 (I) 遺跡 | 53. 松ヶ崎 (I) 遺跡 |
| 25. 水砂 (II) 遺跡 | 54. 松ヶ崎 (II) 遺跡 |
| 26. 水砂 (I) 遺跡 | 55. 谷中上遺跡 |
| 27. 中山新田 (III) 遺跡 | 56. 殿内遺跡 |
| 28. 中山新田 (II) 遺跡 | 57. 青田第II遺跡 |
| 29. 中山新田 (I) 遺跡 | |

第1図 遺跡位置と周辺遺跡 (S=1/25,000)



第2図 迅速測図 (S=1/25,000)

順次発掘調査が実施された。

本書に所収するのは、事業予定地内に所在する柏市大割遺跡、同農協前遺跡の2遺跡の縄文時代以降を対象とした上層調査分の調査成果である。両遺跡の旧石器時代を対象とした下層調査分の調査成果については、公益財団法人千葉県教育振興財団によって整理作業が先行して行われ、既に調査報告書が上梓されている。^(註)

大割遺跡は柏市若柴字大割 227 - 1 ほかに所在する。調査対象地は 178,200㎡を測る広大な範囲に及び、平成 13 年 4 月に行われた第 1 次調査を皮切りに、平成 19 年 8 月までの、計 18 回に及ぶ発掘調査が行われた。ただし、既報告の旧石器時代の成果に比べ、本書で報告する縄文時代以降の遺構・遺物は検出数及び出土量ともに極めて少なく、調査対象面積のほぼ 10%にあたる 17,894㎡の確認調査を経た後、必要とされた本調査範囲の面積は第 6 次調査における 535㎡にとどまった。その他の各次調査においては、検出された遺構・遺物の周囲を拡張して精査し、確認調査の段階で上層の調査を終了した。調査の結果、検出された遺構は、縄文時代前期の竪穴住居跡 1 軒、早期の炉穴 5 群 11 基、陥穴 8 基、土坑 1 基、平安時代の土坑 1 基を数える。

農協前遺跡は柏市大室字正連寺前 257 - 11 ほかに所在する。平成 14 年度に 6,730㎡の範囲を対象に確認調査を実施したところ、縄文時代前期の竪穴住居跡 1 軒を検出したため、その周囲を拡張して遺構を精査し、確認調査の段階で上層の調査を終了した。最終的な確認調査面積は、調査対象面積の約 12%にあたる 850㎡となった。

両遺跡の縄文時代以降を対象とした上層調査分の整理作業は、千葉県教育庁教育振興部文化財課発掘調査班が平成 25 年度より実施し、翌平成 26 年度に本報告書の刊行に至った。

第 3 表 整理作業実施期間

年度	遺跡名	作業工程	作業期間	課 長	副 課 長	発掘調査班長	担当者 (主任・上席文化財主事)
H25	大割 (1) ~ (15)	記録整理～トレースの一部	H25.4.1 ~ H25.5.31	湯浅京子	道上みゆき 金丸 誠	蜂屋孝之	山田貴久 田井知二
	農協前 (1)						
H26	大割 (1) ~ (15)	トレースの一部～原稿執筆	H26.11.3 ~ H26.12.26	永沼律朗	大森けい子 金丸 誠	蜂屋孝之	落合章雄
	農協前 (1)						

註 (財) 千葉県教育振興財団 2011 『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書 3 - 柏市農協前遺跡 -』 千葉県教育振興財団調査報告第 657 集

(財) 千葉県教育振興財団 2012 『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書 4 - 柏市大割遺跡・須賀井遺跡 -』 千葉県教育振興財団調査報告第 692 集

2. 発掘調査の方法 (第 3 図)

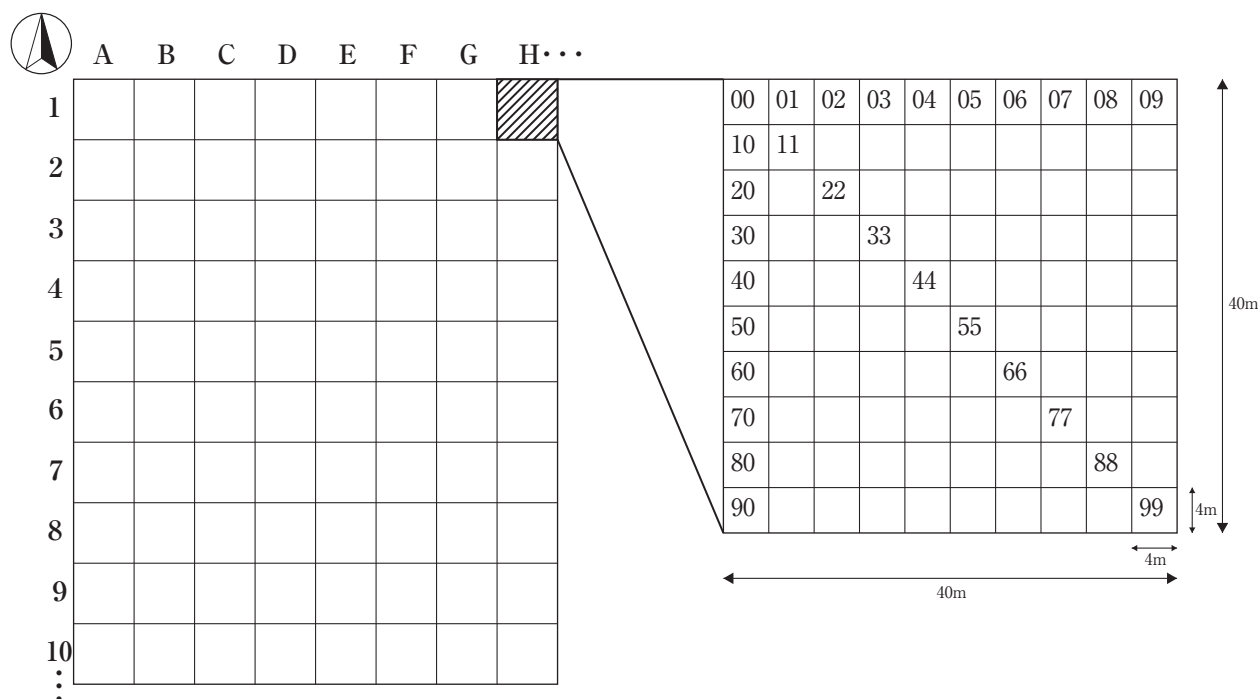
両遺跡の各次の発掘調査は、縄文時代以降を対象とした上層の確認調査から着手した。台地の平坦面及び緩斜面にある調査対象地の地形及び形状に合わせて幅 2m・長さ 20m ~ 40m ほどのトレンチを設定し、表土・畑の耕作土を重機で除去した後、遺構・遺物の検出に努めた。遺構・遺物が検出されたトレンチでは周囲の拡張を適宜行い、本調査が必要な範囲を決定した上で本調査に移行した。上層の本調査では調査範囲の表土を広く除去した後、遺構等の精査・実測・写真撮影等の諸作業を行った。また、トレンチ周囲の拡張を行っても遺構・遺物の追加検出がない場合は、引き続き遺構の精査・実測・写真撮影の諸作業を

行い、確認調査の段階で調査を終了した。

発掘調査では、確認調査に先行して調査対象地の基準点測量を行った。基準点測量は、多角測量、水準測量、方眼杭打測量からなり、調査範囲内に座標値と水準値を持った方眼杭を打設するものである。この方眼杭は調査に付随する各種実測作業の際に必要となるもので、国土方眼座標（世界測地系・平面直角座標第Ⅸ系）を用いて、柏北部中央地区土地区画整理事業予定地内に所在するすべての遺跡範囲を覆う形で40m×40m方眼の大グリッドを設定した。大グリッドの名称は、基点より南に向かって算用数字で1・2・3…、東に向かってアルファベット大文字でA・B・C…とし、これを組み合わせて呼称する方針とした。なお、東に向かうグリッドについては、Zまで割り振った26番目のグリッド以降、AA・BB・CC…と大文字2つを重ねる表記とし、最終的にA1グリッドから70TTグリッドまでを設定した。

大割遺跡の調査対象範囲は、南北方向で28～39グリッド、東西方向でO～FFグリッドにあたり、農協前遺跡の調査対象範囲は、南北方向で4～8グリッド、東西方向でHH～KKグリッドにあたる。

さらに、この大グリッドを4m×4m方眼の小グリッドに100分割し、北西隅より東に向かって00～09、南に向かって00～90と割り振り、大グリッド名と小グリッド名を組み合わせハイフンで結んだ英数字を小グリッドの名称とした。そして、各小グリッドの北西隅に当たる方眼杭にこの小グリッドの名称を表記した。



第3図 グリッド模式図

また、今回は整理作業の各工程において記録のデジタル化に取り組んだ。発掘調査時に従来の方法で図化・記録された調査対象範囲図及びトレンチ及びグリッド配置図、個別遺構の平面図・断面図・遺物出土分布図、各種記録写真及び整理作業時に作成した遺物の実測図・拓影図については、それぞれスキャナーで取り込んだ後、Adobe社製のIllustrator、Photoshopでデータ化し、挿図作成・図版作成を行った。また、出土遺物の写真については、デジタルカメラで写真撮影を行った。それらのデジタルデータを用いてAdobe社製のInDesignで編集作業を行い、報告書の原稿作成を行った。

第2節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地形（第1・2・4図、図版1）

千葉県北西部に位置する柏市は、北は利根川を挟んで茨城県と面し、東は手賀沼が我孫子市との境を画している。昭和30年代後半以降、東京のベッドタウンあるいは衛星都市として人口が急増し、平成17年3月に旧沼南町を編入した後、船橋市に次いで県内で2番目に中核市への移行を果たしている。

柏北部中央地区土地区画整理事業は、柏市若柴地区、正連寺地区、十余二地区にまたがる面積273ha、計画人口26,000人の大規模な土地区画整理事業である。事業予定地内を首都圏新都市鉄道つくばエクスプレスが高架構造で南北に縦断し、そのほぼ中央に柏の葉キャンパス駅が位置している。北側には十余二工業団地が展開し、東側を走る国道16号線は、常磐自動車道柏インターチェンジとのアクセスの良さから自動車交通の要衝の構成要素となっている。また西側に隣接する柏の葉地区には、独立行政法人国立がん研究センター東病院、東京大学柏キャンパス、千葉大学柏の葉キャンパス、県立柏の葉公園等、国や県の各種機関や施設が集積し、文教地区を構成している。

柏市周辺の地形を概観すると、北部に利根川が流れ、北西部には利根運河、中央部には大堀川、南部には大津川、さらに東部の手賀沼といった河川・湖沼に囲まれ、それらの支流にあたる河川によって樹枝状に開析された低地と、低地との比高が5mほどしかない標高18m前後の低平な下総台地（千葉第1段丘：武蔵野面）によって成り立っている。土地区画整理事業は、正連寺地区の湧水地を水源の一つとする地金堀の左岸及び地金堀と大堀川に挟まれた台地上を中心に計画されたもので、事業予定地内には9か所の遺跡と野馬土手が含まれている。

本書で報告する2遺跡のうち、大割遺跡は事業予定地のほぼ中央に位置し、地金堀の右岸で比較的平坦な台地上に立地し、農協前遺跡は事業予定地の北端に位置し、地金堀の左岸台地上のわずかに西に下る緩斜面に立地している。

2. 周辺の主な遺跡（第1・4図、第4・5表）

柏市北部地域の台地は大小の河川により複雑に開析されており、古水系の観点から3水系に大別される。現利根運河周辺には利根川から延びる三ヶ尾湿地が存在し、この周辺は古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地とされる。また、利根川と手賀沼に挟まれた柏市から我孫子市にかけての低地を古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地としている。これらに対し事業予定地付近は手賀沼に流入する小河川に由来する低地であるため、手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地とされる。

これらの低地には数多くの遺跡の所在が知られており、また昭和46年（1971年）に実施された北柏地区土地区画整理事業、昭和52年（1977年）の常磐自動車道建設といった事業に伴い、大規模調査が開始されたこともあり、遺跡数の増加とともに周辺地域の各時代の様相が明らかになりつつある。この書は大割遺跡・農協前遺跡の縄文時代以降について纏めたものであり、よって主に縄文時代の周辺遺跡と各時期の特徴について概括しておきたい。

草創期については元割遺跡で石槍・植刃のまとまった資料が検出されている。早期については遺構の存在が不明瞭ながらも撚糸文系土器の出土が駒形遺跡、花前（Ⅰ）遺跡、中山新田（Ⅰ）・（Ⅲ）遺跡で確認されている。この時期の遺構が検出されるのは条痕文系土器を伴う炉穴が主であり、小山台遺跡を始め花前（Ⅲ）遺跡、水砂（Ⅰ）・（Ⅱ）遺跡等で確認されている。遺構に伴わないがこの時期の土器が検出され

第4表 周辺遺跡（1）

No.	遺跡名	所在地	水系	遺跡種別	遺構等	備考
1	大割遺跡	柏市若菜字大割 227-1 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	早期、前期	炉穴
2	農協前遺跡	柏市大室正連寺 156 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	前期	
3	北花崎遺跡	柏市花野井北花崎 746 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	前期	
4	屋敷内遺跡	柏市正連寺字屋敷内	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡	黒浜住居 7・土坑 6・陥穴 3・ 遺構内貝層	旧正連寺貝塚含む
5	内山遺跡	柏市正連寺字内山 394-3 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	早期（捺糸文、条痕文）	陥穴
6	須賀井遺跡	柏市若柴 226-3 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	前期、中期	陥穴
7	原山遺跡	柏市若柴字原山	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡	黒浜住居 6・陥穴 8	
8	溜井台遺跡	柏市若柴字溜井台 264-1 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	早期（井草・夏島・子母口～野島・茅山上層）、 前期（黒浜・諸磯・浮島・前期末）、中期（阿玉台・ 加曾利 E）、後期（堀之内・加曾利 B）	陥穴
9	翁原遺跡	柏市十余二字翁原	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	早期（井草・夏島）	
10	駒形遺跡	柏市小青田字駒形	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡・ 貝塚	黒浜住居 13 以上・遺構内貝層・炉穴	早期捺糸文～沈線文集石 早期条痕文～前期後葉集落跡 川端貝塚
11	富士見遺跡	柏市小青田字立山	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡・ 貝塚	花積下層集落・黒浜拠点集落 住居 100 以上・遺構内貝層・炉穴	駒形・小青田貝塚
12	大松遺跡	柏市小青田字大松	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡・ 貝塚	関山Ⅱ～黒浜集落 住居 10 以上・遺構内貝層	中期前葉～後葉拠点集落 大松貝塚
13	原畑遺跡	柏市大室字原畑	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡・ 貝塚	黒浜住居 19・土坑 5・遺構内貝層	
14	小山台遺跡	柏市大室字前畑	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡・ 貝塚	黒浜住居 10 以上・遺構内貝層・炉穴	中期中葉～後葉拠点集落 前畑貝塚
15	寺下前遺跡	柏市花野井字寺下前	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡・ 貝塚	黒浜住居 1	
16	宮前遺跡	柏市大室宮前 1615	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	後期	
17	八反目台遺跡	柏市大室字東山 1479-1 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	前期、中期	
18	花前（Ⅰ）遺跡	柏市船戸字花前	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡・ 貝塚	黒浜住居 8・遺構内貝層	後期前葉集落跡
19	花前（Ⅱ）遺跡	柏市船戸字新町	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡	前期後葉集落跡	後期前葉集落跡
20	花前（Ⅲ）遺跡	柏市船戸新町 1472 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡・ 包蔵地	早期（井草～稻荷台・茅山・茅山上層以降給条 体圧痕）、前期（浮島Ⅰ・諸磯 a・b）、中期（加 曾利 EⅡ）、後期（堀之内Ⅰ）	花前Ⅱ-1 遺跡、前期後葉集落 跡、炉穴
21	矢船（Ⅰ）遺跡	柏市船戸字矢ノ船	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡	前期集落跡 土製球状耳飾り出土	矢船遺跡
22	矢船（Ⅱ）遺跡	柏市船戸字矢ノ船	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡	前期集落跡 土坑・陥穴検出	
23	館林（Ⅱ）遺跡	柏市船戸字館林 1781 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	包蔵地	早期（田戸下層・田戸上層・茅山）、前期（諸磯 b・ c・浮島・興津・十三善堤・前期末）、中期（五 領ヶ台・阿玉台Ⅰ a～Ⅰ b）、後期（加曾利 B）	
24	館林（Ⅰ）遺跡	柏市船戸字館林 1731 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	包蔵地	早期（田戸下層・田戸上層・茅山）、前期（諸磯 b・ c・浮島・興津・十三善堤・前期末）、中期（五 領ヶ台・阿玉台Ⅰ a～Ⅰ b）、後期（加曾利 B）	
25	水砂（Ⅱ）遺跡	柏市大青田水砂 1559 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	集落跡・ 包蔵地	早期（稻荷台・三戸・田戸下層・田戸上層・茅 山）、前期（黒浜・諸磯・浮島・興津・前期末）、 中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰ a～Ⅳ・勝坂・中峠・ 加曾利 EⅡ～Ⅲ）	水砂遺跡、中期前葉集落跡、 炉穴
26	水砂（Ⅰ）遺跡	柏市大青田水砂 1551 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	集落跡・ 包蔵地	早期（稻荷台・三戸・田戸下層・田戸上層・茅 山）、前期（黒浜・諸磯・浮島・興津・前期末）、 中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰ a～Ⅳ・勝坂・中峠・ 加曾利 EⅡ～Ⅲ）	水砂遺跡、中期前葉集落跡、 炉穴
27	中山新田（Ⅲ）遺跡	柏市大青田字八両野 744 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	包蔵地	早期（捺糸文終末・茅山）、前期（諸磯 a・c・ 浮島）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅱ・Ⅲ・加曾利 E）、 晚期（安行 3 a）	中山新田Ⅲ遺跡、炉穴、土坑
28	中山新田（Ⅱ）遺跡	柏市大青田字八両野 744 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	集落跡・ 包蔵地	早期（茅山）、前期（諸磯 a・c・浮島Ⅰ～Ⅲ・ 興津・前期末）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰ b～Ⅳ・ 勝坂・中峠・加曾利 EⅡ～Ⅲ）、後期（加曾利 B・ 安行）、晚期（安行 3 c・大洞 A 併行）	中山新田Ⅱ遺跡、中期前葉集 落跡、陥穴
29	中山新田（Ⅰ）遺跡	柏市十余二字 572 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	集落跡・ 貝塚・包 蔵地	早期（井草～稻荷台・三戸・田戸下層・子母口 ～茅山上層以降）、前期（関山Ⅱ・黒浜・諸磯 b・浮島Ⅱ・Ⅲ・興津・前期末）、中期（五領ヶ 台・阿玉台Ⅰ a～Ⅳ・勝坂・中峠・加曾利 EⅢ）、 後期（称名寺・堀之内・加曾利 B・安行Ⅰ・Ⅱ）、 晚期（大洞 A 併行）	中山新田Ⅰ遺跡、中期前葉集 落跡、炉穴

第5表 周辺遺跡（2）

No.	遺跡名	所在地	水系	遺跡種別	遺構等	備考
30	聖人塚遺跡	柏市大青田字聖人塚 694 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	集落跡・ 包蔵地	早期（夏島・田戸下層・子母口～茅山上層以降）、 前期（黒浜・諸磯 a～c・浮島Ⅱ・Ⅲ・興津・ 前期末）、中期（五領ヶ台・阿玉台Ⅰ a～Ⅳ・勝坂・ 中峠・加曾利 EⅢ）、後期（称名寺・堀之内・ 加曾利 B・安行 1・2）、晩期（大洞 A 併行）	聖人塚遺跡、中期前葉集落跡、 炬穴
31	元割遺跡	柏市青田新田飛地字 元割 212 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	包蔵地	中期（勝坂）	元割遺跡、旧石器終末～草創 期の石槍・植刃
32	出山遺跡	柏市大青田出山全区 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	包蔵地	中期（勝坂・加曾利 E）、後期（加曾利 B Ⅰ）	
33	稲荷山遺跡	柏市大青田稲荷山 296 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	包蔵地	中期（阿玉台）	
34	小川向遺跡	柏市大青田小川 547 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	包蔵地	前期（浮島Ⅲ・諸磯 b）、中期（阿玉台・加曾利 E）	
35	川津台遺跡	柏市大青田川津台 1387 他	古常陸川湾奥部： 三ヶ尾低地	包蔵地	中期（阿玉台・加曾利 EⅡ）	
36	大山遺跡	柏市大青田小渡 1603 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	中期（阿玉台・加曾利 E）	
37	正連寺貝塚	柏市正連寺内山 420 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡・ 貝塚	前期（黒浜）	遺構内貝層？
38	北花崎遺跡	柏市花野井北花崎 746 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	後期（加曾利 B）	
39	田中小遺跡	柏市大室中野台 1256	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡	前期（黒浜）、中期（阿玉台）、後期（安行）	住居跡、堀立建物跡
40	尾井戸（Ⅰ）遺跡	柏市花野井尾井戸 1827 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡	早期（鶴ヶ島台・茅山上層）、前期（関山・黒浜・ 諸磯・浮島）、中期（加曾利 E）	住居跡
41	尾井戸（Ⅱ）遺跡	柏市花野井尾井戸 1764 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	早期（茅山）、前期（関山）、中期（阿玉台・加 曾利 E）	
42	寺前遺跡	柏市花野井寺前一带	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡・ 貝塚	前期（黒浜・浮島）、中期（加曾利 E）、後期	住居跡
43	原（Ⅰ）遺跡	柏市花野井原 970 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	中期（加曾利 E）	
44	原（Ⅱ）遺跡	柏市花野井丸山 1070 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	中期、後期	
45	三畝割遺跡	柏市花野井三畝割 1179 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	早期、後期	
46	塩辛遺跡	柏市花野井塩辛 1414 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	早期（茅山）、前期（黒浜・興津）、中期（阿玉台・ 加曾利 E）	
47	上前留遺跡	柏市花野井字上前留	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡	黒浜住居 3	
48	香取神社遺跡	柏市花野井字西高野	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	集落跡	黒浜住居 1	
49	宿連寺遺跡	柏市宿連寺木戸ノ内 344 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡・ 包蔵地	前期（黒浜）、中期（阿玉台・加曾利 E）、後期（安行）	住居跡
50	鴻ノ巣（Ⅱ）遺跡	柏市十余二字鴻ノ巣	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡・ 貝塚	黒浜住居 20・遺構内貝層	
51	南原遺跡	柏市松ヶ崎南原 1083-1 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	前期	
52	八幡遺跡	柏市松ヶ崎八幡 328 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡	前期（黒浜）	住居跡
53	松ヶ崎（Ⅰ）遺跡	柏市松ヶ崎井戸作 419 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡	前期（黒浜）	前期中葉集落跡？、遺構内貝 層？、炬穴
54	松ヶ崎（Ⅱ）遺跡	柏市松ヶ崎八幡 351 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡	前期（黒浜）	住居跡
55	谷中上遺跡	柏市高田谷中上 790 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	包蔵地	前期、後期（加曾利 B）	
56	殿内遺跡	柏市高田西下ノ台 1030 他	古常陸川湾奥部： 柏・我孫子低地	集落跡	前期（浮島）、中期（加曾利 E）	住居跡
57	青田第Ⅱ遺跡	流山市青田 140 他	手賀・印旛沼湾奥部： 手賀沼低地	包蔵地	中期（阿玉台・加曾利 E）	

た遺跡が増加する傾向が認められる。前期については、花積下層式土器、関山式土器の検出例は減少するが、駒形遺跡、富士見遺跡、大松遺跡では住居跡が検出されている。黒浜式期になると遺跡数、遺構数ともに増加し、小・中規模の集落が形成される。特に富士見遺跡では 100 軒を上回る竪穴住居跡が検出され、富士見遺跡に隣接する駒形遺跡、大松遺跡や近隣の原畑遺跡、小山台遺跡の調査成果を加味すると、この地域の拠点集落であるといえる。第 3 章で紹介する農協前遺跡で検出された住居跡についても、この拠点集落との密接な関係が指摘されよう。浮島・興津式期については、古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地に偏る傾向が認められ、この低地に属する中山新田（Ⅰ）～（Ⅲ）遺跡、館林（Ⅰ）・（Ⅱ）遺跡等で遺構・遺物の

検出が認められるが、小規模な集落を形成するのみで、黒浜式期と比較すると遺跡数、遺構数ともに減少する。中期については、阿玉台式・勝坂式期に遺跡数が増加し、水砂（Ⅰ）・（Ⅱ）遺跡、中山新田（Ⅰ）・（Ⅱ）遺跡等で小・中規模の集落が形成される。特筆されるのは、この期から後続する加曾利E式期にわたり形成された環状集落が大松遺跡、小山台遺跡で検出されていることであり、報告の詳細に期待したい。後期については堀之内式期の小・中規模集落が花前（Ⅰ）・（Ⅱ）遺跡にみられるものの、遺跡数としては減少する傾向が指摘される。晩期については聖人塚遺跡、中山新田（Ⅰ）～（Ⅲ）遺跡等で遺物の検出は認められるものの、遺構の存在については不明瞭である。

以上、簡単ではあるが大割遺跡・農協前遺跡周辺の遺跡について略説した。3水系に大別される周辺地域の様相は、直接的に当時の自然環境に大きく影響していたことが考えられ、さらに細分された小支谷の影響も資料の蓄積とともに明らかとなる。

参考文献

千葉県都市公社 1974年『柏市鴻ノ巣遺跡』

（財）千葉県文化財センター 1982年『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－館林、水砂、花前Ⅱ－1－』

（財）千葉県文化財センター 1984年『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ－』

（財）千葉県文化財センター 1985年『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－花前Ⅱ－1・花前Ⅱ－2・矢船－』

（財）千葉県文化財センター 1986年『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－元割・聖人塚・中山新田Ⅰ－』

（財）千葉県教育振興財団 2007年『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書1－柏市溜井台遺跡－』

（財）千葉県教育振興財団 2008年『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書1－柏市大松遺跡－ 旧石器時代編』

（財）千葉県教育振興財団 2009年『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書2－柏市原山遺跡－ 旧石器時代編』

（財）千葉県教育振興財団 2009年『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡－ 縄文時代以降編1』

（財）千葉県教育振興財団 2011年『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書3－柏市原畑遺跡－ 縄文時代以降編1』

第2章 大割遺跡

第1節 調査の概要（第5・6図、第6表、図版2）

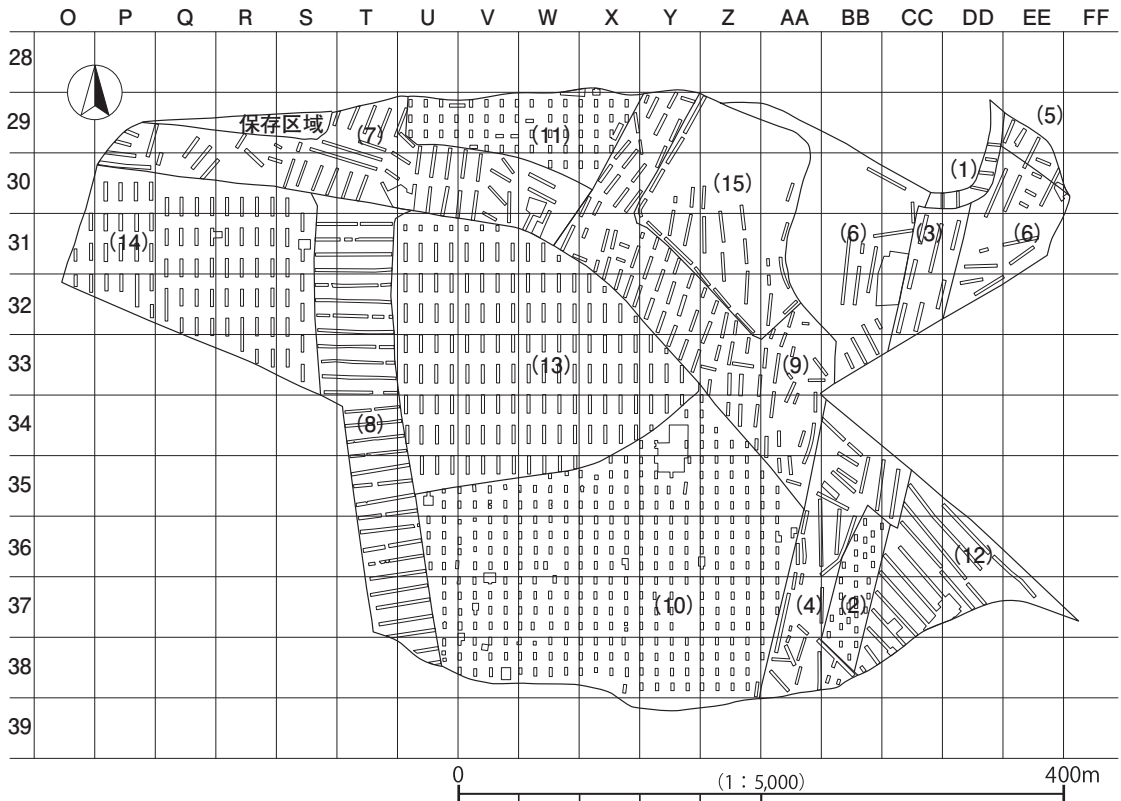
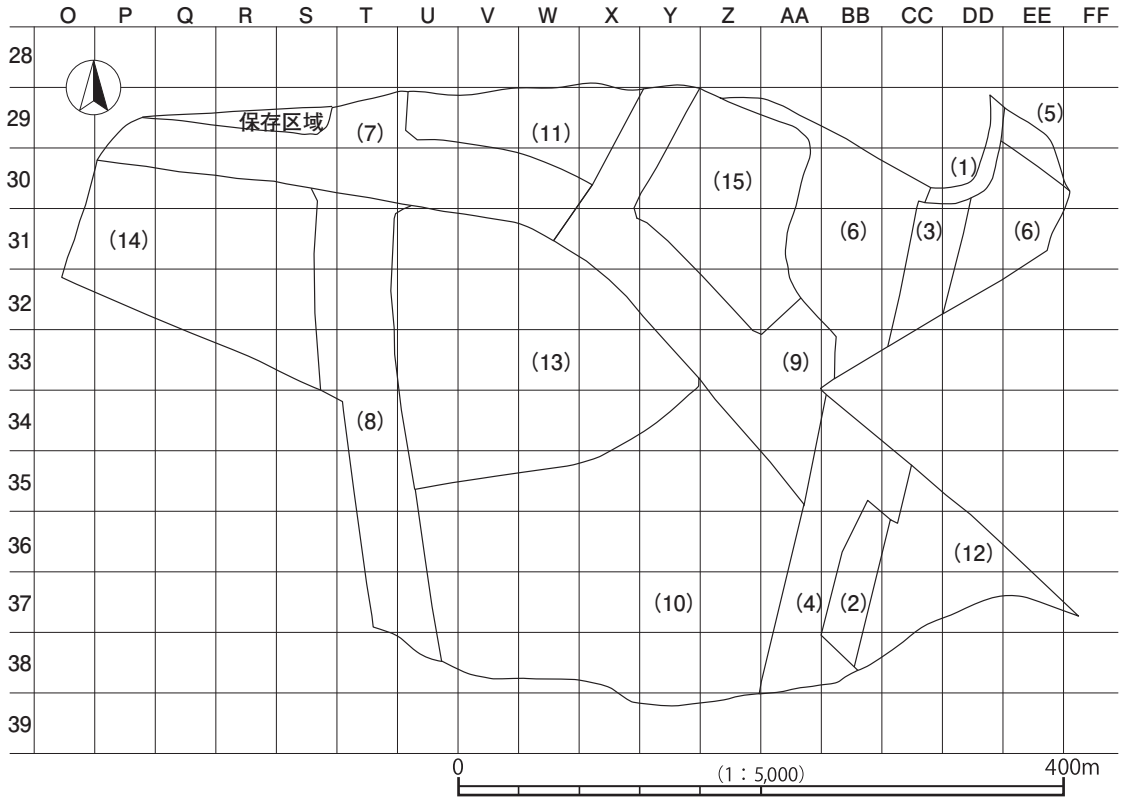
大割遺跡は、手賀沼に流入する地金堀の右岸にある標高20mほどの台地上に立地する。平成13年度から平成19年度までの間に、178,200㎡を対象に15次・18回に及ぶ調査が実施され、密度は非常に薄いものの、ほぼ全域に散在するように遺構が検出された。検出された遺構は、縄文時代前期の竪穴住居跡1軒、早期の炉穴5群11基、陥穴8基、土坑1基、平安時代の土坑1基である。縄文時代の遺構の遺跡内における分布状況を見ると、竪穴住居跡は北東部に単独で、土坑は南東寄りの陥穴2基の近くで検出され、炉穴5群11基は南東部の谷頭に臨む台地縁辺部に集中して検出されている。また、陥穴8基は単独あるいは2基ずつ台地上の5地点に広く散在している。また、各次調査別に見ると、第6次調査に竪穴住居跡1軒、第10次調査に土坑1基と陥穴4基、第11次調査に陥穴1基、第12次調査に炉穴5群11基と陥穴1基、第14次調査に陥穴2基を検出している。平安時代の土坑は、第10次調査の際に遺跡の中央近くに単独で検出されている。

以下、遺構及び主な出土遺物について記述する。なお、各遺構の遺構番号は新たに付け直さずに、整理作業から報告書掲載まで一貫して調査時の番号を踏襲した。ただし、番号の重複を避けるため、遺構番号の前に各次調査の番号を括弧数字で冠し、例えば(6)SI001のように表記することにした。

第6表 大割遺跡遺構一覧

遺構番号	種別	グリッド番号	形状	プラン		深さ	主軸方位	所見
				長軸	短軸			
(6) SI001	竪穴住居跡	32C - 13	(隅円長方形)	[378]	600	15	N - (87°) - E	焼土堆積1か所 ピット2か所
(10) SK003	土坑	36AA - 32・33	略円形	123	118	104	N - 77° - W	
(10) SK006	土坑	34Y - 86・96	(不整円形)	(78)	(73)	[12]	N - 10° - W	焼土堆積
(12) SK002	炉穴	37DD - 31	A: 不整楕円形 B: 隅円長方形	180 174	(105) (102)	0.77 0.80	N - 68° - E 22° - W	2基重複 (旧) B 炉 → A 炉 (新)
(12) SK003	炉穴	37CC - 49	A: 隅円長方形 B: 不整楕円形 C: (隅円長方形)	205 (164) [077]	110 137 107	45 [40] [24]	N - 72° - W 17° - E (27°) - W	3基重複 (旧) C 炉 → B 炉 → A 炉 (新)
(12) SK004	炉穴	37DD - 60・70	A: 不整楕円形 B: 不整楕円形	197 [91]	117 (100)	55 [25]	N - 52° - W 40° - E	2基重複 (旧) B 炉 → A 炉 (新)
(12) SK005	炉穴	37CC - 81	A: (楕円形) B: 隅円長方形 C: (不整楕円形)	(140) 180 249	(98) [69] (110)	42 48 39	N - 44° - E 57° - W 71° - W	3基重複 (旧) C 炉 → A・B 炉 (新) A・B 炉の新旧は不明
(12) SK006	炉穴	37CC - 71	不整楕円形	[60]	[46]	[5]	N - 27° - W	下層本調査時に検出 遺構上部不詳
(10) SK001	陥穴	37V - 42・43・52	楕円形	305	186	178	N - 63° - E	
(10) SK002	陥穴	36Y - 79 36Z - 70	楕円形	305	187	165	N - 15° - W	
(10) SK004	陥穴	36AA - 25	溝状	[236]	[71]	133	N - 68° - E	下層確認調査時に検出 遺構上部不詳
(10) SK005	陥穴	37V - 90	楕円形	286	173	238	N - 6° - W	
(11) SK001	陥穴	28X - 92 29X - 02	楕円形	244	150	218	N - 58° - E	
(12) SK001	陥穴	38CC - 21・22	楕円形	(330)	240	310	N - 76° - E	下層確認調査時に検出 遺構上部一部不詳
(14) SK001	陥穴	31S - 55	楕円形	187	134	191	N - 89° - E	下層確認調査時に検出 検出面はⅦ層中
(14) SK002	陥穴	31R - 30	溝状	273	117	184	N - 29° - W	短辺側両壁オーバーハング
	遺物集中地点	35Y - 32・33	-	-	-	-	-	土器4点、石鏃1点
	遺物集中地点	37V - 05	-	-	-	-	-	土器8点
	遺物集中地点	38V - 14	-	-	-	-	-	土器2点?

(推定値)、[調査できた範囲の値] / 単位はcm



第5図 年次別調査範囲とトレンチ配置図

第2節 遺構と出土遺物

1. 竪穴住居跡（第7図、第6表、図版3・6）

(6) SI001

遺跡範囲の北東部 32C - 13 グリッド付近から単独で検出された。ちょうど第3次調査と第6次調査の調査区境にあたる位置にあり、第6次調査で調査された遺構の西側部分だけの記録が残されていた。

検出されたプランは、長軸部分長 3.78m × 短軸 6.00m を測る隅円長方形を呈し、ほぼ東西方向に主軸を持つと推測される。断面を観察すると、ゴルフ場造成に伴う攪乱の下に、覆土の黒色土がほぼ水平に堆積している。浅い壁はほぼ垂直で、検出面からの深さ 15cm で床面に至る。床面には焼土の堆積が 1 か所及びピットが 2 か所検出された。周溝は認められなかった。

南西隅の壁際で検出された焼土の堆積は、60cm～70cmの不整円形の範囲に、2cm～5cmほどの厚さで焼土が堆積したもので、位置的にも焼土化の状況からも炉とは考えにくい。

2か所のピットは床面上に不規則に配置され、深さ 16cm を測る P1 から完形の土器が出土した。西壁に近い P2 は小径ながら 40cm と深く、柱穴の可能性はある。

遺物はほとんどが小破片の状態であったが、出土量は比較的多く、覆土全域に分布している。出土土器は全て胎土に植物繊維を含む。1 は口縁部に 4 単位の小突起を有し、胴部上位にくびれを持つ器形である。文様は軸の痕跡が不明瞭であるが、附加条 R 2 本を反対方向に絡げた附加条 2 種が施され、菱形状の文様を描出している。口径 33.0cm、底径 8.1cm、推定器高 41.5cm を測る。2・3 は胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形であり、2 は軸の縄 L に附加条 L を同方向に絡げた附加条第 1 種を施文している。3 は軸の縄の痕跡が不明瞭であるが、附加条 R による附加条縄文が認められる。2 の推定口径は 21.7cm であり、小型の深鉢である。4 は口縁部付近の破片で、1 と同様の施文具による附加条文が認められる。5・6 は胴部がやや湾曲し立ち上がる器形であり、5 の器表面には 3 と同様の附加条 R、6 には軸の縄 L に附加条 L を絡げた附加条縄文が施文される。7・8 は土器片を再利用した土製円板である。

他の非掲載の土器片を含めて、出土した遺物はすべて縄文時代前期・黒浜式のものであり、該期の竪穴住居跡と考えられる。

2. 土坑（第8図、第6表、図版4・8）

(10) SK003

遺跡範囲の南東部に近い 36AA - 32・33 グリッドから検出された。北東方向に約 10m 離れて (10) SK004 陥穴が、南西方向に約 22m 離れて (10) SK002 陥穴が存在する。

検出面でのプランは、直径 1.18m～1.23m を測る略円形を呈する。検出面から底面まで 1.04m を測る壁は、上部 1/3 はやや傾斜を持って、下部 2/3 は概ね垂直に底面に至る。ほぼ平坦な底面は、直径 0.78m を測る略円形を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。

遺物は全く出土していないが、形状・覆土の状態等の特徴を踏まえ縄文時代の土坑と推測される。

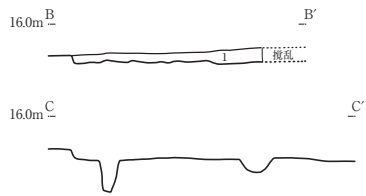
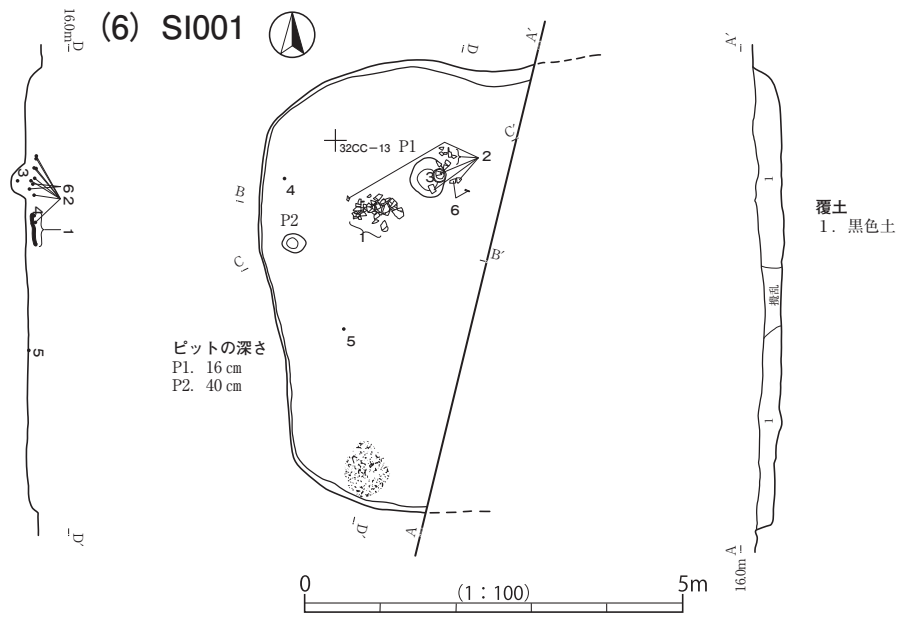
(10) SK006

遺跡範囲の中央部に近い 34Y - 86・96 グリッドから単独で検出された。

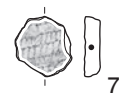
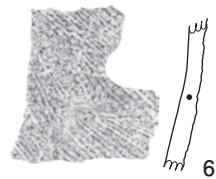
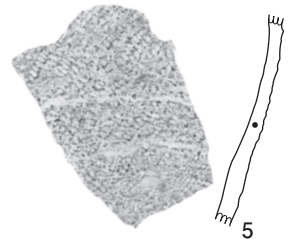
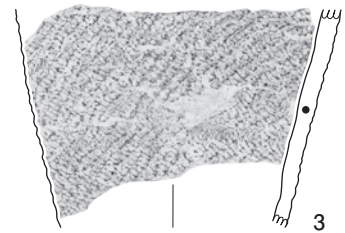
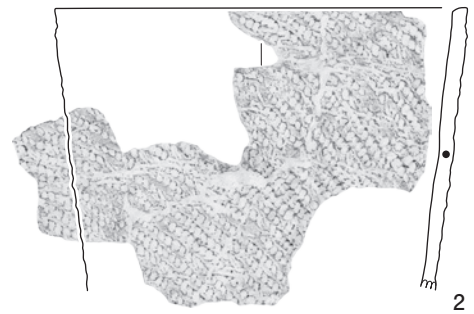
遺存していたのは、直径 75cm ほどの不整円形と推測されるプランの東側 1/3 程度で、断面形は深さ 12cm ほどの浅い皿状を呈する。覆土は 2 層に分層され、上層の黒褐色土中に少量の炭化物片及び焼土粒が含



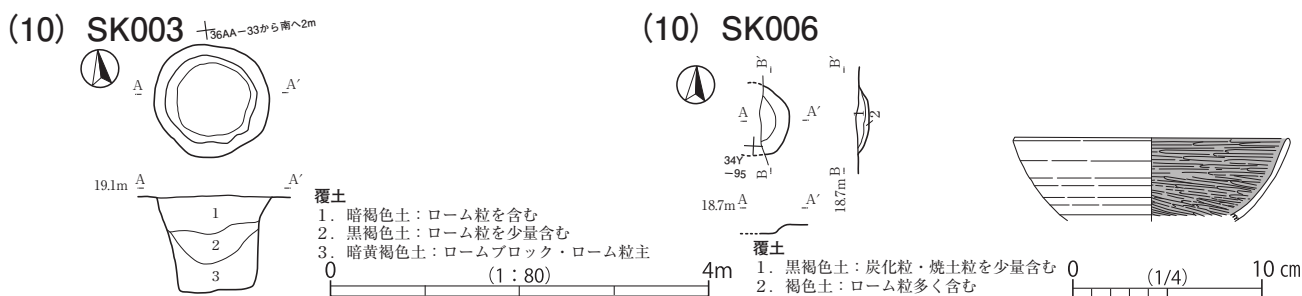
第6图 遺構配置図 (S=1/2,500)



覆土
1. 黒色土



第7図 (6) SI001 と出土遺物



第8図 土坑

まれていたことから調査時には炉跡を想定していたが、焼土化の状況等、残された記録類から判断すると炉跡と断定するのは難しい。

出土遺物は非常に少ない。1は黒色処理した土師器坏の口縁部片である。口径14.5cmに復元され、体部外面にはロクロ整形痕、内面は密なヘラミガキ調整が認められる。これ以外に遺物がないことから、平安時代の土坑として報告する。

3. 炉穴（第9・10図、第6・7表、図版4・6）

炉穴は11基が検出された。5つの群から構成され、そのすべてが遺跡範囲の南東端の谷頭に臨む台地縁辺部に集中している。出土土器から早期後半の条痕文土器の時期と考えられる。

(12) SK002

37DD - 31グリッドから検出された。南西方向に約6m離れて(12)SK003炉穴が、南南西方向に約13m離れて(12)SK004炉穴が位置する。2か所検出された火床部のうち、東側をA炉、西側をB炉とすると、覆土及び構築状況等の観察からB炉が古く、A炉が新しいことが見て取れる。

B炉は、長軸1.74m × 短軸推定1.02mを測る隅円長方形を呈し、主軸方位はN - 22° - Wである。検出面から底面まで80cmを測る壁は、概ね垂直に底面に至る。底面の大半はA炉構築の際に壊されているが、主軸上の北西端に径60cmほどの火床部の一部が残る。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

A炉は、長軸1.80m × 短軸推定1.05mを測る不整楕円形を呈し、主軸方位はN - 68° - Eで、B炉の主軸とほぼ直交する。検出面から底面まで77cmを測る壁は、概ね垂直に底面に至る。底面はほぼ平坦で、主軸上の北東端に径60cm ~ 65cmほどの火床部を持つ。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

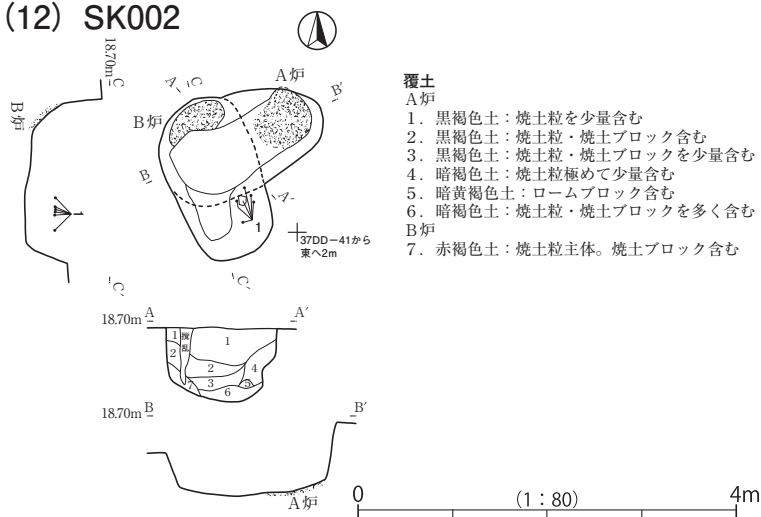
遺物は主にB炉覆土から出土している。出土土器は胎土に植物繊維を含む。1は放射肋を有する貝殻条痕が横位に施され、口唇部には貝殻腹縁の圧痕が認められる。底部付近から器厚を変えず緩やかに内彎する器形であり、口縁部は平縁である。推定口径は22.5cmを測る。

(12) SK003

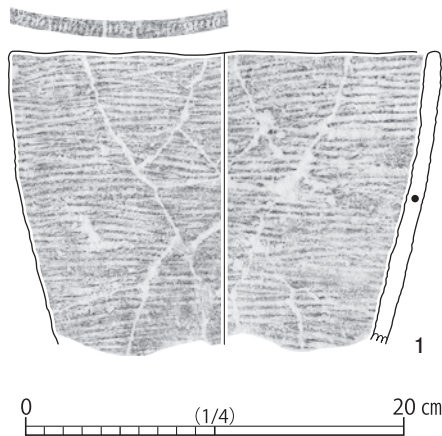
37CC - 49グリッドから検出された。北東方向に約6m離れて(12)SK002炉穴が、南南東方向に約11m離れて(12)SK004炉穴が位置する。3か所検出された火床部のうち、西側をA炉、南東側をB炉、北東側をC炉とすると、覆土及び構築状況等の観察からC炉が最も古く、B炉、A炉の順に新しいと判断できる。

C炉は、長軸遺存長0.77m × 短軸推定1.07mを測る隅円長方形を呈し、主軸方位はN - 27° - Wと推定される。検出面から底面まで24cmを測る壁は、概ね垂直に底面に至る。底面の過半はB炉及びA炉構

(12) SK002

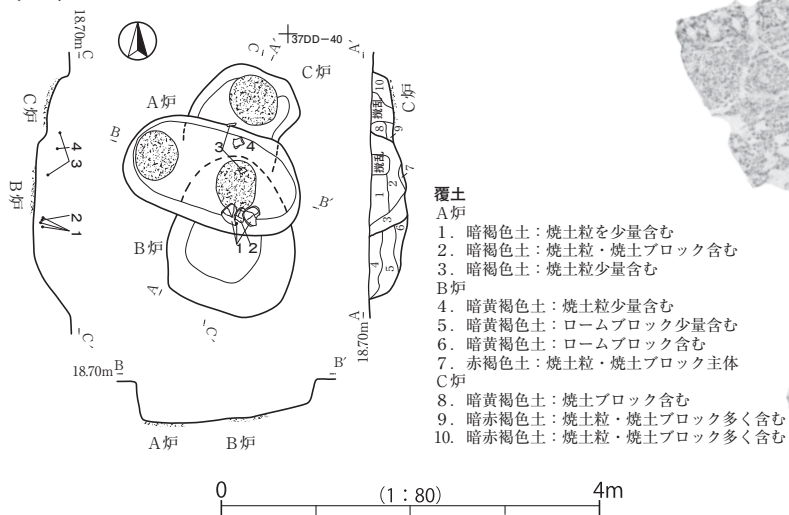


- 覆土**
A 炉
 1. 黒褐色土：焼土粒を少量含む
 2. 黒褐色土：焼土粒・焼土ブロック含む
 3. 黒褐色土：焼土粒・焼土ブロックを少量含む
 4. 暗褐色土：焼土粒極めて少量含む
 5. 暗黄褐色土：ロームブロック含む
 6. 暗褐色土：焼土粒・焼土ブロックを多く含む
B 炉
 7. 赤褐色土：焼土粒主体。焼土ブロック含む

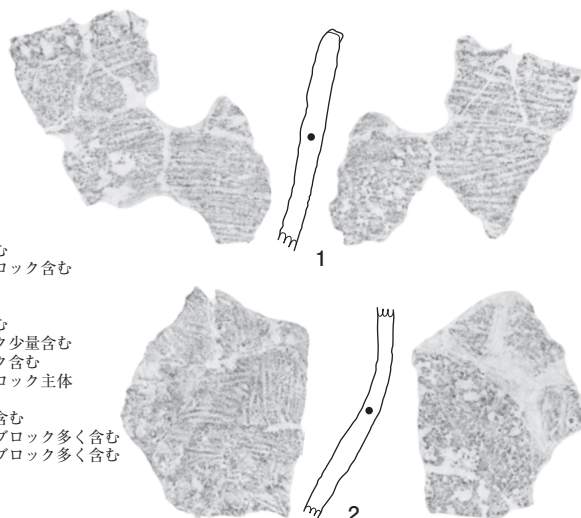


0 (1/4) 20 cm

(12) SK003

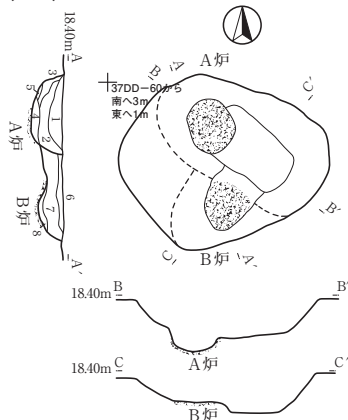


- 覆土**
A 炉
 1. 暗褐色土：焼土粒を少量含む
 2. 暗褐色土：焼土粒・焼土ブロック含む
 3. 暗褐色土：焼土粒少量含む
B 炉
 4. 暗黄褐色土：焼土粒少量含む
 5. 暗黄褐色土：ロームブロック少量含む
 6. 暗黄褐色土：ロームブロック含む
 7. 赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック主体
C 炉
 8. 暗黄褐色土：焼土ブロック含む
 9. 暗赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック多く含む
 10. 暗赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック多く含む

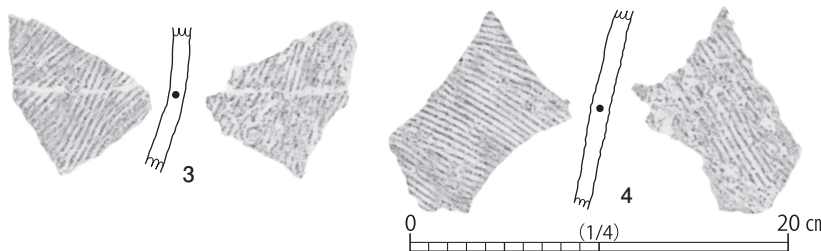


0 (1:80) 4m

(12) SK004

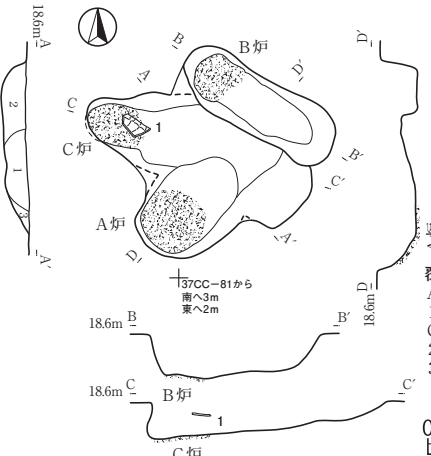


- 覆土**
A 炉
 1. 暗褐色土：焼土粒を少量含む
 2. 暗褐色土：焼土粒含む
 3. 暗赤褐色土：焼土粒・焼土ブロックを多く含む
 4. 赤褐色土：焼土粒多く含む
 5. 暗褐色土：焼土粒・炭化粒含む
B 炉
 6. 暗褐色土：焼土粒極めて少量含む
 7. 暗褐色土：焼土粒・焼土ブロック含む
 8. 暗赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック含む



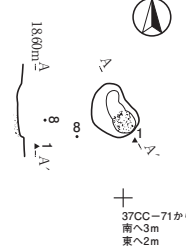
0 (1/4) 20 cm

(12) SK005



- 覆土**
A 炉
 1. 暗褐色土：焼土粒・焼土ブロック多く含む
C 炉
 2. 暗褐色土：焼土粒少量含む
 3. 暗褐色土：焼土粒含む

(12) SK006



- 覆土**
A 炉
 1. 暗褐色土：焼土粒・焼土ブロック多く含む
C 炉
 2. 暗褐色土：焼土粒少量含む
 3. 暗褐色土：焼土粒含む

0 (1:80) 4m

第9図 炉穴 (1)

築の際に壊されているが、主軸上の北東端に径 50cm～60cmを測る火床部が残る。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

B 炉は、長軸推定 1.64m × 短軸 1.37m を測る不整楕円形を呈し、主軸方位は N - 17° - E で、推定した C 炉の主軸とは 10° 振れる。検出面から底面まで 40cm を測る壁は、やや傾斜を持って底面に至る。底面の半分程度は A 炉構築の際に壊されているが、主軸上の北東端と思われる場所に径 45cm～55cm を測る火床部の一部が残る。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

A 炉は、長軸 2.05m × 短軸 1.10m を測る隅円長方形を呈し、主軸方位は N - 72° - E で、B 炉及び推定した C 炉の主軸とほぼ直交する。検出面から底面まで 45cm を測る壁は、概ね垂直に底面に至る。底面は、北西端の径 50cm～55cm を測る火床部に向かって緩やかに下がっている。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

遺物は主に A 炉覆土から出土している。放射肋を有する貝殻条痕が縦・横・斜位の多方向に施され、1 の口縁部直下には貝殻圧痕が認められる。

(12) SK004

37DD - 60・70 グリッドから検出された。北北東方向に約 13m 離れて (12) SK002 炉穴が、北北西方向に約 11m 離れて (12) SK003 炉穴が位置する。火床部が 2 か所検出され、北側を A 炉、南側を B 炉とすると、覆土及び遺構の構築状況等の観察から B 炉が古く、A 炉が新しいことが見て取れる。

B 炉は、長軸遺存長 0.91m × 短軸推定 1.00m を測る不整楕円形を呈し、主軸方位は N - 40° - E (N - 140° - W) と推定される。検出面から底面まで 25cm を測る壁は、傾斜を持って底面に至る。底面の大半は A 炉構築の際に壊されているが、主軸上の南西端に径 50cm ほどの火床部が残る。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

A 炉は、長軸 1.97m × 短軸 1.17m を測る不整楕円形を呈し、主軸方位は N - 52° - W で、推定した B 炉の主軸とほぼ直交する。検出面から底面まで 55cm を測る壁は、傾斜を持って底面に至る。底面はほぼ平坦で、主軸上の北西端に径 50cm ほどの火床部を持つ。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

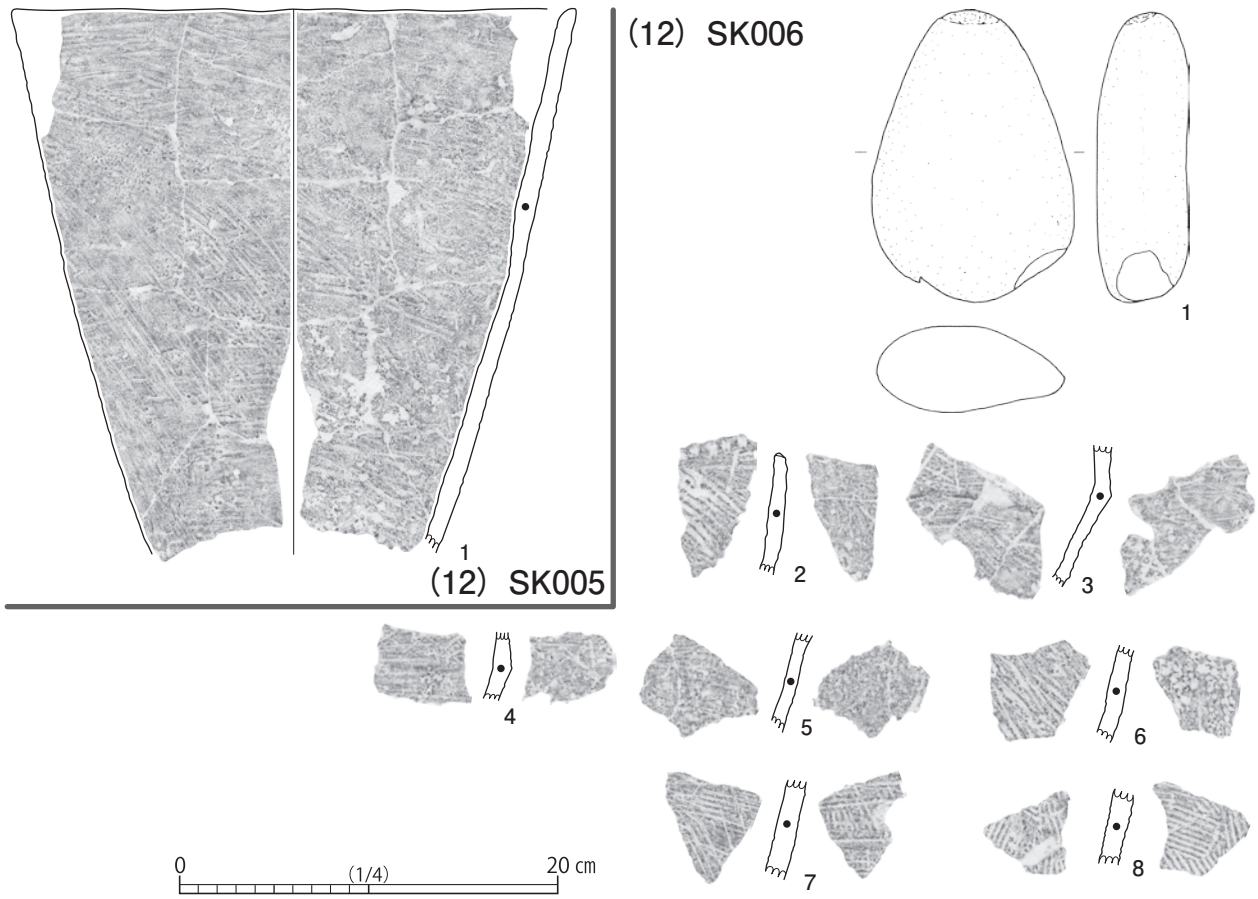
遺物は全く出土していない。

(12) SK005

37CC - 81 グリッドから検出された。北方向に約 3m 離れて (12) SK006 炉穴が、南方向に約 15m 離れて (12) SK001 陥穴が位置する。3 か所検出された火床部のうち、南西側を A 炉、北西側を B 炉、西側を C 炉とすると、覆土及び遺構の構築状況等の観察から C 炉が古く、B 炉と A 炉が新しいと判断できるが、A 炉と B 炉の新旧関係は不明である。

C 炉は、長軸 2.49m × 短軸推定 1.10m を測る不整楕円形を呈し、主軸方位は N - 71° - W である。検出面から底面まで 39cm を測る壁は、平場側で緩やかに、火床部側で概ね垂直に底面に至る。底面は、A 炉構築の際に一部壊されているもののほぼ平坦で、主軸上の北西端に径 40cm～60cm を測る火床部を持つ。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

B 炉は、長軸 1.80m × 短軸遺存長 0.69m を測る隅円長方形を呈し、主軸方位は N - 57° - W で、推定した C 炉の主軸との差は 14° を測る。検出面から底面まで 48cm を測る壁は、やや傾斜を持って底面に至る。底面はほぼ平坦で、主軸上の北西端と思われる場所に径 45cm～50cm の火床部を持つ。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。



第10図 炉穴（2）

A炉は、長軸推定1.40m × 短軸推定0.98mを測る楕円形を呈し、主軸方位はN - 44° - E(N - 136° - W)で、平場側から火床部を見た場合、B炉の主軸とは79°、C炉とは65°振れる。検出面から底面まで42cmを測る壁は、やや傾斜を持って底面に至る。底面は、南西端の径60cm～65cmを測る火床部に向かって緩やかに下がる。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

遺物は胴部から口縁部にかけての破片が、C炉火床部から浮いた状態で出土している。1は胴部下位から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形であり、口縁部は平縁となる。放射肋を有する貝殻条痕が横・斜位に施される。推定口径は29.6cmを測る。

(12) SK006

37CC - 71 グリッドから検出された。南方向に約3m離れて(12) SK005 炉穴が位置する。本遺跡で検出された他の炉穴と異なり、唯一単独で検出されたが、このことは本遺構が下層本調査の際の検出で、既に遺構の大半が削られてしまったことに起因している可能性も否めない。

遺存したプランは、長軸0.60m × 短軸0.46mを測る不整楕円形を呈し、主軸方位はN - 29° - Wである。検出面からわずか5cmでほぼ平坦な底面に至る。ほぼ平坦な底面は、主軸上の南東端に径20cm～25cmを測る火床部を持つ。壁及び底面に施設等の痕跡は認められない。

遺物は、砂岩製の敲石と土器小片が数点検出されている。1は砂岩製の敲石で、ティア・ドロップ形状の礫の両端に敲打痕が認められる。2～8の土器片の内外面には放射肋を有する貝殻条痕が縦・横・斜位

に施される。2の口縁部直下には貝殻圧痕が認められる。3・4の胴部上半部位の破片には明瞭なくびれ部が形成される。

4. 陥穴（第11・12図、第6・7表、図版5・6）

陥穴は全部で8基が検出された。遺跡範囲の北端、東側に2地点、西側、南端の5地点に、単独あるいは近接する2基が点在している。

(10) SK001

遺跡範囲の南西端、37V - 42・43・52グリッドから検出された。南西方向に25mほど離れて(10)SK005陥穴が位置する。

検出面でのプランは長軸3.05m×短軸1.86mを測る楕円形を呈し、主軸方位はN - 63° - Eである。検出面から底面まで1.78mを測る壁は、長軸側壁ではやや傾斜を持って、短軸側壁では概ね垂直に底面に至る。ほぼ平坦な底面は、長軸2.60m×短軸0.50m～0.90mを測り、中央部の幅が狭く両端が広いわゆる分銅形を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。覆土間層に見られる特徴的な黒色土（6層）の存在は、陥穴としての複次利用の可能性を示唆している。

主軸の向きは異なるが、北東方向に約150m離れて存在する(10)SK002と形状等がほぼ一致する。

遺物は縄文時代中期加曽利E I式の土器片と石鏃未製品が検出している。これらは覆土の上層から出土しており、遺構がほぼ埋没した時点で混入したものと考えられる。1～3は深鉢の胴部破片である。1・2は同一個体と考えられ、口縁部直下には2条の沈線、胴部上位には3条、さらにその下位にはやはり3条の沈線が巡り文様区画を形成する。区画内には波状沈線が見られ、縦位のRL単節縄文が充填される。口縁部直下から胴部上位には渦巻状の隆帯が一部認められる。3は底部付近から胴部上位が遺存する。胴部くびれ部の直下には3条の沈線が巡り、その下方には垂下する3条の沈線と1条の波状沈線が施される。口縁部直下から胴部上位には2ないし3条を単位とした弧状沈線が認められる。1・2と同様に縦位のRL単節縄文が全体に充填される。4はチャート製の石鏃未製品である。素材剥片の両側縁を折断、除去し、素材剥片の末端部側に調整を施し基部を作出している。側縁部の折断面は無調整である。

(10) SK002

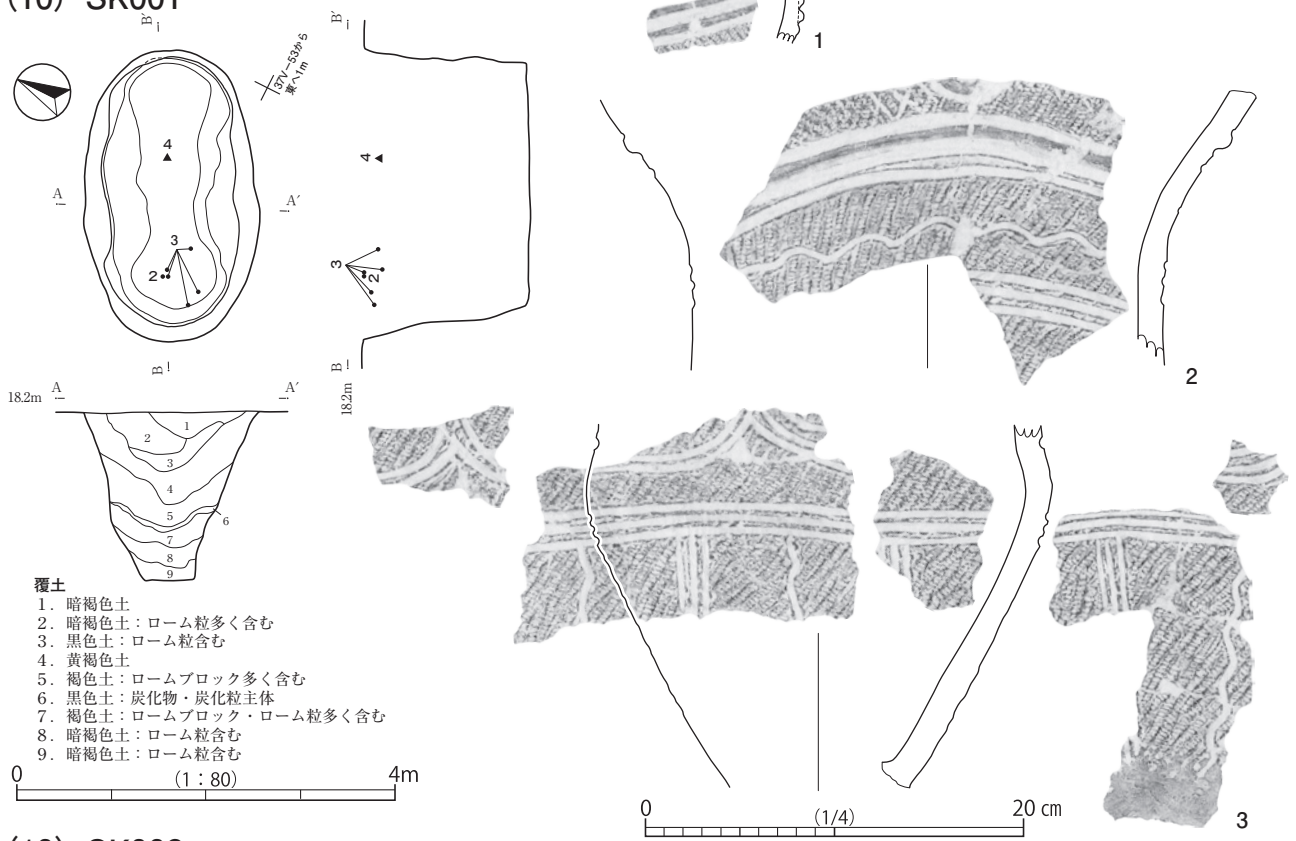
遺跡範囲の南東部に近い36Y - 79、36Z - 70グリッドから検出された。北東方向に約60m離れて(10)SK003土坑が、同じく北東方向に約70m離れて(10)SK004が位置する。

検出面でのプランは長軸3.05m×短軸1.87mを測る楕円形を呈し、主軸方位はN - 15° - Wである。検出面から底面まで1.65mを測る壁は、長軸側壁は上半部ではやや傾斜を持って、下半部及び短軸側壁では概ね垂直に底面に至る。部分的にはオーバーハングする箇所も認められる。ほぼ平坦な底面は、長軸2.60m×短軸0.61m～1.10mを測り、中央部の幅が狭く両端が広いわゆる分銅形を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。覆土間層に見られる特徴的な黒色土（10層）の存在は、陥穴としての複次利用の可能性を示唆している。

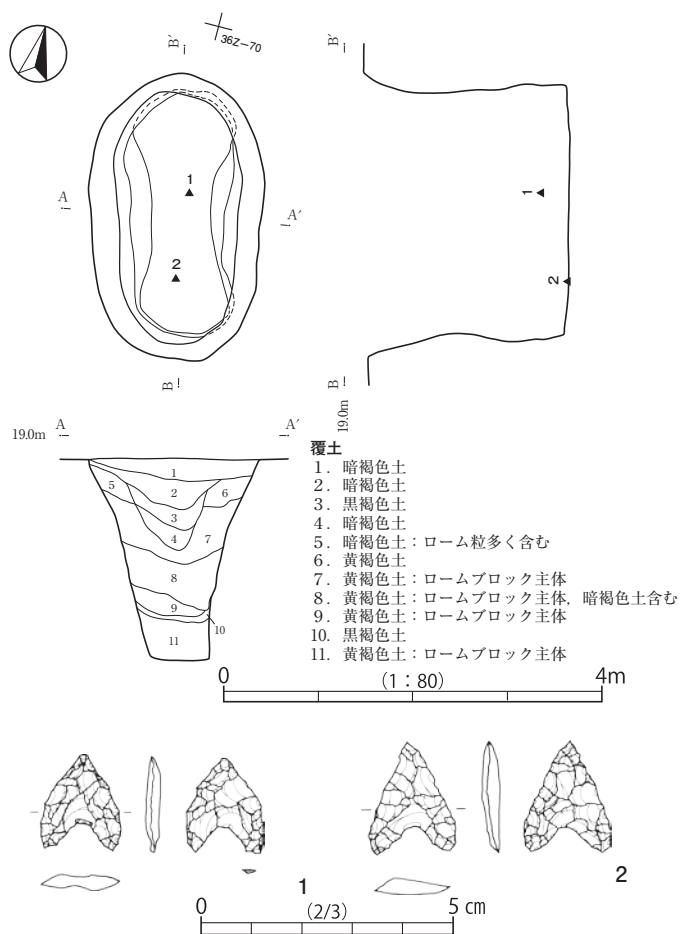
主軸の向きは異なるが、南西方向に約150m離れて存在する(10)SK001と形状等がほぼ一致する。

遺物は2点検出し、いずれもチャート製の凹基無茎石鏃である。1は覆土最下層、2はほぼ底面から出土している。

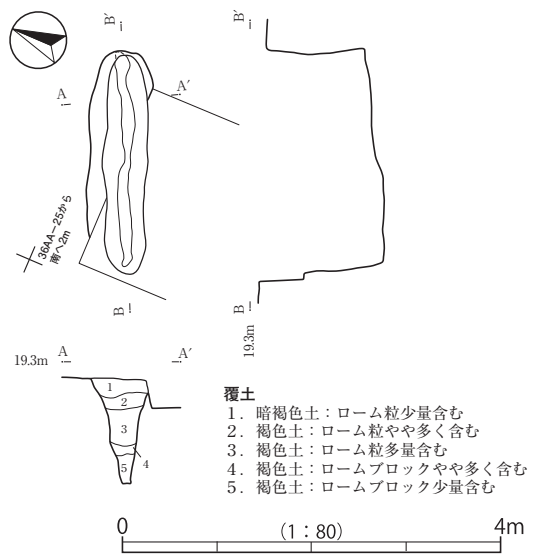
(10) SK001



(10) SK002



(10) SK004



第11図 陥穴(1)

(10) SK004

遺跡範囲の南東部に近い 36AA - 25 グリッドから下層確認調査時に検出された。南西方向に約 10m 離れて (10) SK003 土坑が、同じく南西方向に約 70m 離れて (10) SK002 陥穴が位置する。

検出面でのプランは長軸遺存長 2.36m × 短軸遺存長 0.71m を測る溝状を呈し、主軸方位は N - 68° - E である。検出面から底面まで 1.33m を測る壁は、長軸側壁ではやや傾斜を持って、短軸側壁では概ね垂直に底面に至る。ほぼ平坦な底面は、長さ 2.26m × 幅 0.23m を測る溝状を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。

遺物は非掲載ではあるが中期・加曾利 E 式と思われる土器小片が 1 点出土している。

(10) SK005

遺跡範囲の南西端、37V - 90 グリッド付近から検出された。北東方向に 25m ほど離れて (10) SK001 陥穴が位置する。

検出面でのプランは長軸 2.86m × 短軸 1.73m を測る楕円形を呈し、主軸方位は N - 6° - W である。検出面から底面まで 2.38m を測る壁は、概ね垂直に底面に至る。ほぼ平坦な底面は、長軸 2.34m × 短軸 0.50m ~ 0.85m を測る分銅形を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。覆土間層に見られる特徴的な暗褐色土 (6 層) の存在は、陥穴としての複次利用の可能性を示唆している。

遺物は全く出土していない。

(11) SK001

遺跡範囲の中央北端、28X - 92、29X - 02 グリッド付近から単独で検出された。

検出面でのプランは長軸 2.44m × 短軸 1.50m を測る楕円形を呈する。検出面から底面まで 2.18m を測る壁は、やや傾斜を持って底面に至る。ほぼ平坦な底面は、長軸 64cm × 短軸 42cm を測る楕円形を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。覆土最下層に、陥穴に特徴的な黒色土 (10 層) の堆積が見られる。

遺物は全く出土していない。

(12) SK001

遺跡範囲の南東端の谷頭を臨む台地縁辺部、38CC - 21・22 グリッドから下層確認調査時に検出された。北方向に約 15m 離れて (12) SK005 炉穴が位置する。

検出面でのプランは長軸推定 3.30m × 短軸 2.40m を測る楕円形を呈し、主軸方位は N - 76° - E である。検出面から底面まで 3.10m を測る壁は、長軸側壁ではやや傾斜を持って、短軸側壁では概ね垂直に底面に至る。東西両側の側壁にはオーバーハングする部分が認められる。ほぼ平坦な底面は、長軸 2.83m × 短軸 0.77m を測る楕円形を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。覆土最下層に、陥穴に特徴的な暗褐色土 (7 層) の堆積が見られる。

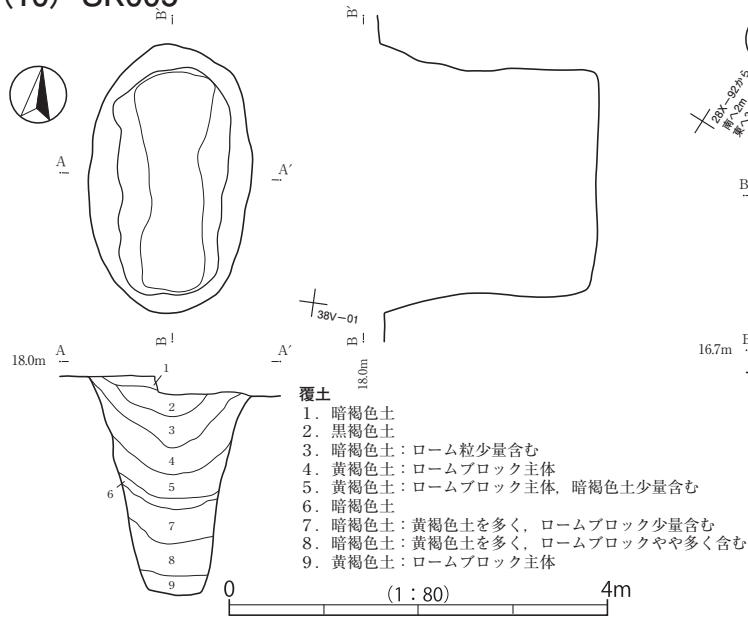
非掲載ではあるが、早期・条痕文系土器の小片が数点、前期・羽状縄文系の土器片が 1 点出土している。

(14) SK001

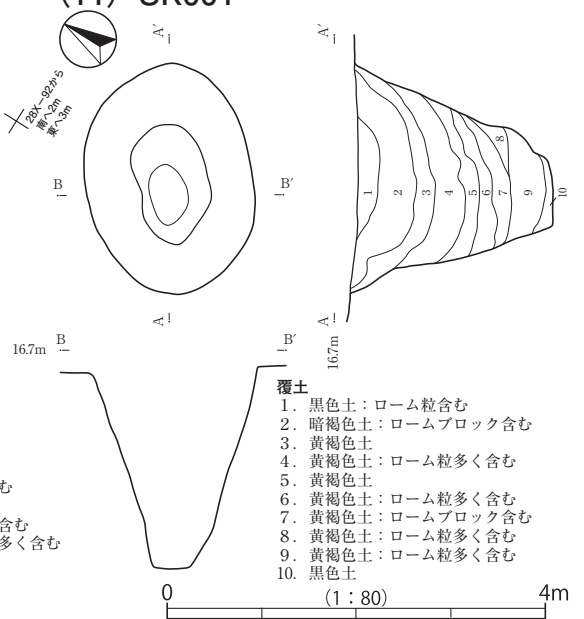
遺跡範囲の北西端に近い 31S - 55 グリッドから下層確認調査時に検出された。西方向に 65m ほど離れて (14) SK002 陥穴が位置する。

検出面でのプランは長軸 1.87m × 短軸 1.34m を測る楕円形を呈し、主軸方位は N - 89° - E と座標北にほぼ直交する。検出面から底面まで 1.91m を測る壁は、短軸側壁は上半部ではやや傾斜を持って、下

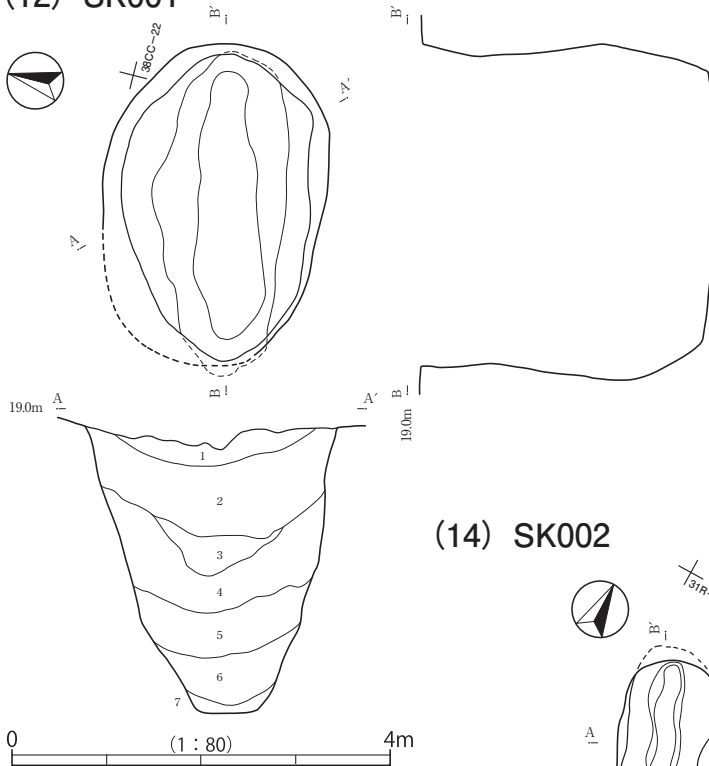
(10) SK005



(11) SK001



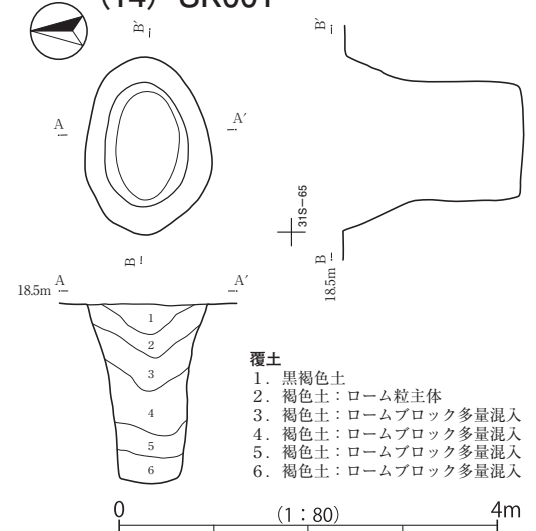
(12) SK001



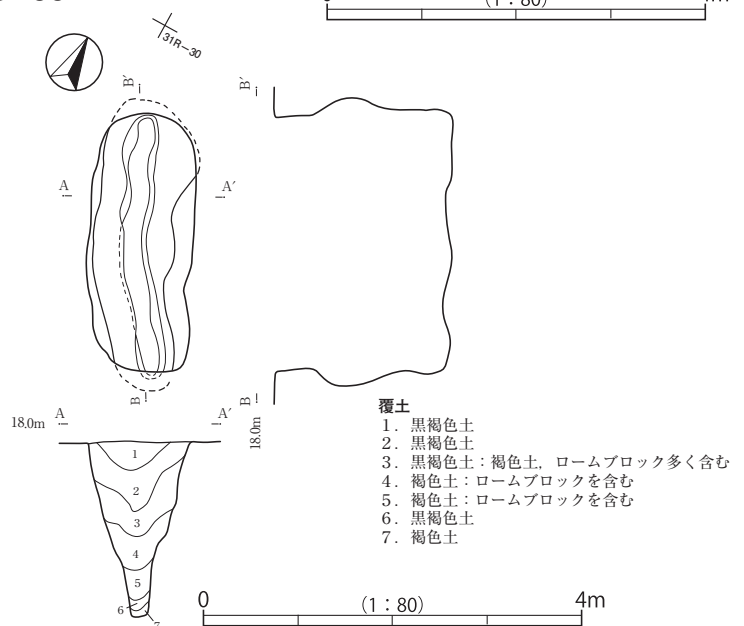
覆土

1. 暗褐色土：ローム粒主体、焼土粒微量含む
2. 黄褐色土：ローム粒主体、炭化物・焼土粒含む
3. 暗黄褐色土：ローム粒主体、ロームブロック含む
4. 暗黄褐色土：ローム粒主体、ロームブロック含む
5. 暗黄褐色土：ローム粒主体、ロームブロック含む
6. 暗黄褐色土：ローム粒主体、ロームブロック少量含む
7. 暗褐色土：ローム粒主体、黒色土混入

(14) SK001



(14) SK002



第12図 陥穴(2)

半部及び長軸側壁では概ね垂直に底面に至る。検出面はⅦ層中という調査時の注記があり、構築時にはかなりの深さがあったことを窺わせる。ほぼ平坦な底面は、長軸 1.22m × 短軸 0.78m を測る楕円形を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。

遺物は全く出土していない。

(14) SK002

遺跡範囲の北西端に近い 31R - 30 グリッドから検出された。東方向に 65m ほど離れて (14) SK001 陥穴が位置する。

検出面でのプランは長軸長 2.73m × 短軸 1.17m を測る溝状を呈し、主軸方位は N - 29° - W である。検出面から底面まで 1.84m を測る壁は、概ね垂直に底面に至る。北西・南東両側の側壁は、壁中位が大きくオーバーハングし、その最大長は 3.08m を測る。やや凹凸のある底面は、長さ 2.71m × 幅 0.18m ~ 0.23m を測る溝状を呈する。壁及び底面には施設等の痕跡は認められない。覆土下層に、陥穴に特徴的な黒色土 (6 層) の堆積が見られる。

遺物は全く出土していない。

第 3 節 トレンチ及びグリッド出土の遺物

1. 縄文土器 (第 13・14 図、図版 6・7)

大割遺跡では、遺構に伴わない土器片が多数出土している。早期撚糸文系土器から晩期千網式土器と多期にわたり、出土量は中期前葉の阿玉台式土器が最も多い。

1 は早期前半の撚糸文系土器である。丸みを帯びる口唇部はよく磨かれ、縦位を基本とした L R 縄文が施文される。夏島式土器と考えられる。

2 ~ 9 は早期後半の条痕文系土器である。2 ~ 4 は波状口縁の口唇部に小さな刺突をもつ。浮線文と円形刺突で文様区画を構成し、区画内は貝殻文を充填している。5・6 は沈線により文様区画を構成し、円形刺突は付属しない。区画内は斜格子状の沈線が充填される。いずれも鶴が島台式と考えられる。7 ~ 9 は口唇部外面に刺突をもち、内外面に条痕文が施文される。茅山下層式土器である。

10 から 14 は前期中葉の黒浜式土器である。10・13 は半截竹管状工具による平行沈線が鋸歯状に施文され、13 はさらに横位の平行刺突文が付随する。11・12・14 は L R 単節縄文が施文される。胎土には植物繊維が多く混入する。

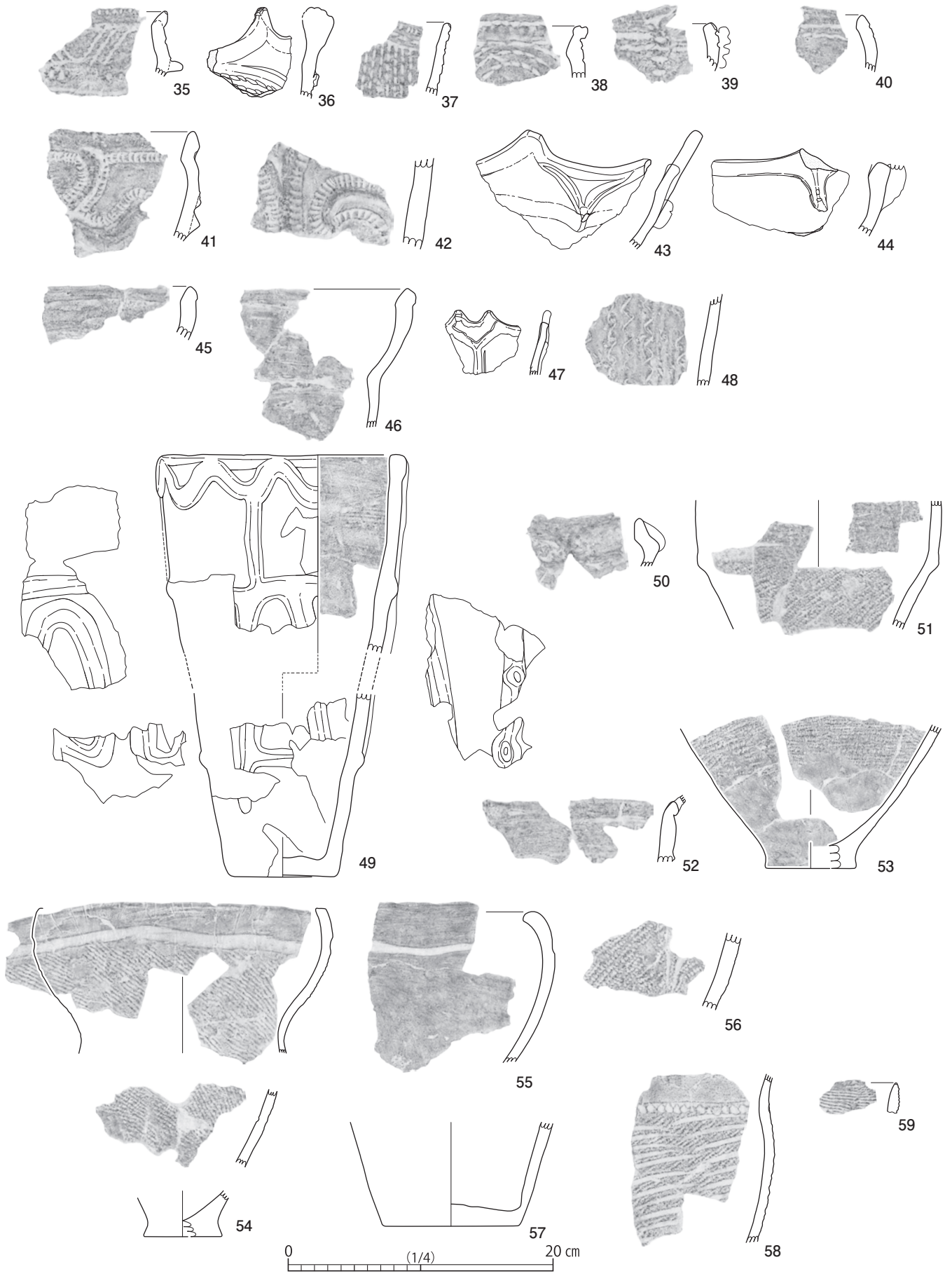
15 は中期初頭の下小野式土器と考えられる。縦位の帯縄文と無文帯が交互に認められる。胎土内には植物繊維は認められず、白色を呈する。

16 ~ 50 は中期前葉の阿玉台式土器である。24・25・45 は浅鉢と考えられ、他は全て深鉢である。裝飾突起 (21・22・23・31・33) や小突起 (18・19・29・36・43・44・47) を有する個体が認められ、また 41・42 の隆帯に沿って幅広の角押文が施文される個体が認められることから、阿玉台式土器のなかでも I b ~ III 式に属する土器群と考えられる。無文の個体は 24・25・26・45・46、隆帯のみの文様は 43・44・47 が挙げられ、他は隆帯による文様区画内に角押文、結節沈線、沈線を施文している。49 は長胴の深鉢である。文様は太い隆帯により形成され、口縁部付近は波状、胴部は垂下する隆帯と曲折した隆帯で区画を設けている。区画内は無文で整形時のナデの痕跡が明瞭に観察できる。

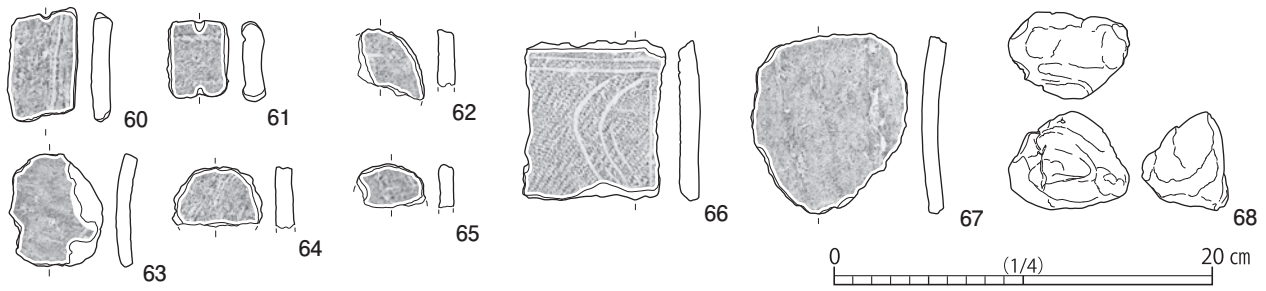
50 ~ 57 は中期後葉の加曾利 E 式土器である。50 は口縁直下に隆帯が認められる。57 は底部付近のみ



第13図 グリッド出土土器 (1)



第14図 グリッド出土土器(2)



第15図 グリッド出土土製品

遺存しており、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる器形である。51～56は口縁部直下に横位の沈線を巡らし、沈線下は縄文を充填もしくは無文となる。垂下する沈線はわずかに56に認められる。54の縄文はR無節縄文、他は全てRL単節縄文である。55は浅鉢、他は深鉢である。

58は後期加曾利B3式土器の胴部破片である。胴部上位のくびれ部には横位の沈線と連続刺突が巡り、下位はLR単節縄文を施文後、平行沈線文が施される。

59は晩期千網式土器と考えられる。口縁部付近の破片で、口唇部は尖り気味に立ち上がる。横位のR燃糸文が施文され、一部に瘤状の小突起が見られる。胎土は密で細かい。

2. 土器片錘・土製品（第15図、図版7）

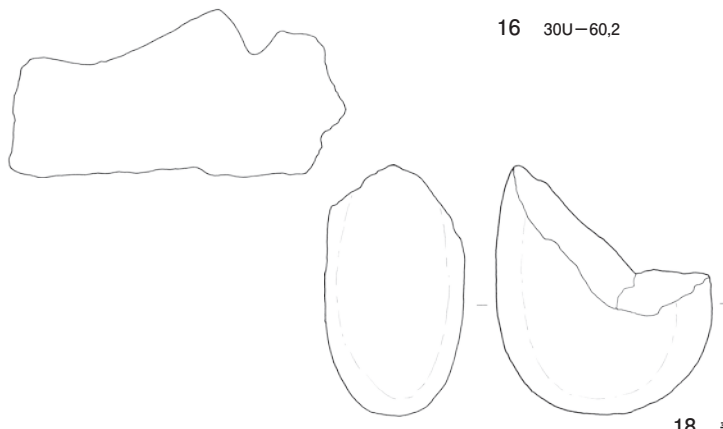
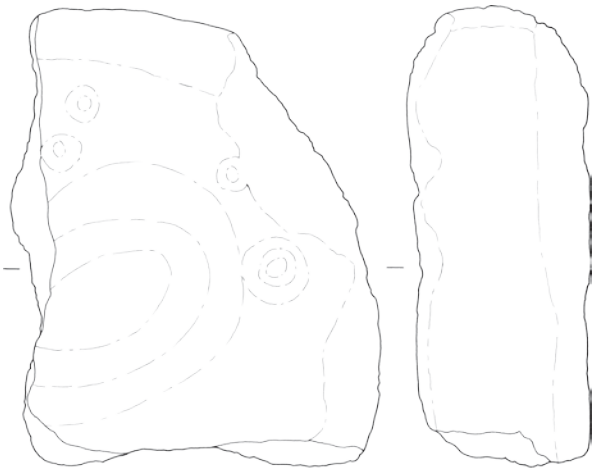
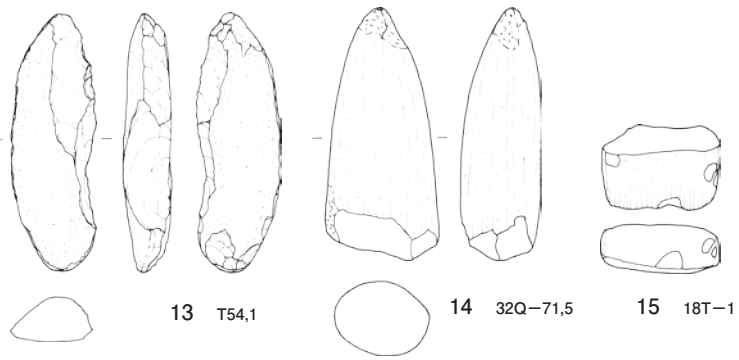
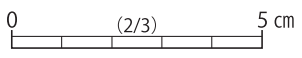
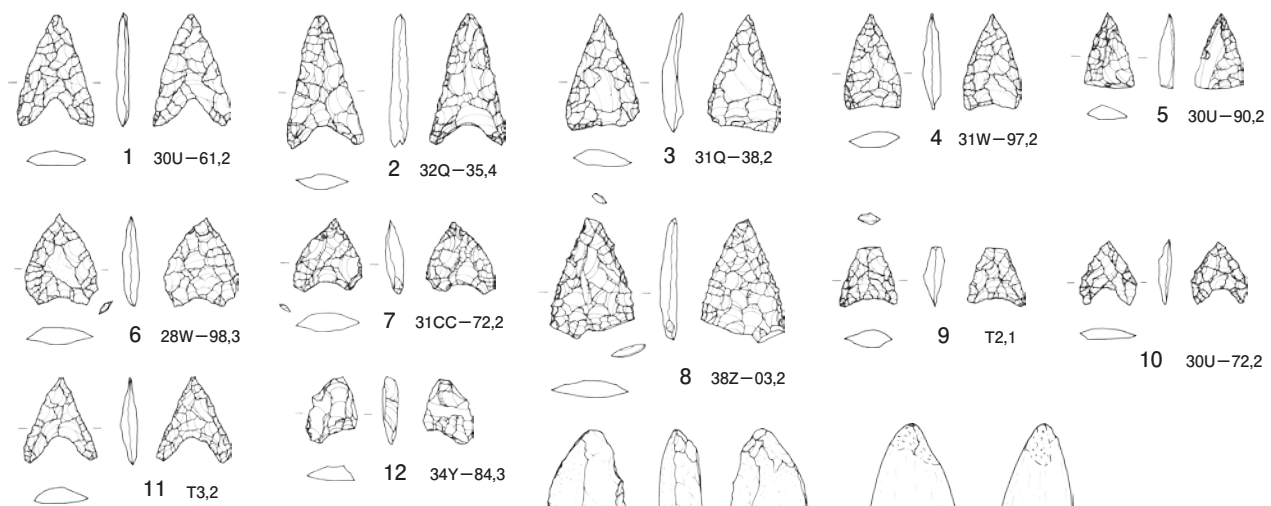
60・61は土器片錘である。長方形を呈する土器片を利用し、長軸方向に切れ目が認められる。両者とも阿玉台式土器片を利用している。62～65は土製円板である。欠損面以外の側縁部は磨りにより整形される。いずれも土器片を再利用しているが、無文のため土器型式は不明である。66・67は欠損面を整形しており、形状から66は土器片錘、67は土製円板の素材とも考えられるが、推測の域を脱することができない。

このほか35Tグリッド付近から粘土塊が4点出土した。大きさ、形状ともに企画性はなく、用途不明である。このうち1点を図示した。68は三角錘状で、焼成により器体は堅緻である。器表面は成形時の凹凸が認められるが、指紋等は見られない。胎土は密で砂粒が混入する。

3. 縄文時代石器（第16図、第7表、図版8）

大割遺跡の調査では、前述した遺構出土の石器以外に、遺構に伴わない石器が出土している。石鏃12点、敲石1点、磨製石斧2点、石皿2点、磨石1点にとどまり、狩猟に関する石器以外の出土点数が希少といえる。

1～12は石鏃である。このうち12については未製品である。形状・大きさに差はあるものの全て凹基無茎鏃で、黒曜石製（5・7・10・12）、凝灰岩製（8）以外はチャート製である。13は変成岩製の敲石である。棒状礫の全周に敲打痕が認められ、特に礫の両端および側縁の一部は敲打による剥落が著しい。14は絹雲母片岩製、15は砂岩製の磨製石斧である。14は断面形状が円形となる播り粉木状の斜刃石斧で、刃部には使用時の剥落痕が認められる。15は刃部のみ遺存し、断面形状が長方形を呈する平刃石斧と考えられる。刃部には使用時の剥落痕が認められる。全面にわたり研磨され、器表面は平滑である。16は絹雲母片岩製、17は安山岩製の石皿である。共に片面のみ使用されるが、16は表面側、17は裏面側に小



第16図 グリッド出土縄文時代石器

第7表 大割遺跡縄文時代石器属性表

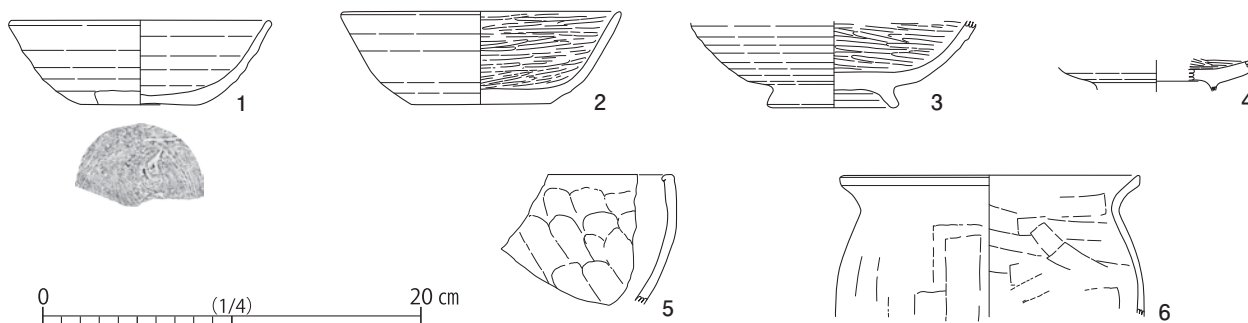
挿 図 番 号	遺構番号	遺物番号	器 種	石 材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g	備 考	
第16図	1	36U - 61	2 石鏃	チャート	25.10	17.05	2.98	0.93		
	2	32Q - 35	4 石鏃	チャート	29.75	17.12	4.56	1.44		
第11図	2	(10) SK002	2 石鏃	チャート	22.07	17.37	3.80	1.02		
第16図	3	31Q - 38	2 石鏃	チャート	26.50	16.76	4.75	1.38		
	4	31W - 97	2 石鏃	チャート	21.20	12.75	4.03	0.94	赤チャート	
	5	30U - 90	2 石鏃	黒曜石	16.84	11.08	4.18	0.48		
	6	28W - 98	3 石鏃	チャート	20.05	17.33	3.50	1.12		
	7	31CC - 72	2 石鏃	黒曜石	16.65	15.74	3.96	0.73		
	8	38Z - 03	2 石鏃	凝灰岩	22.15	19.08	4.51	1.60		
	9	T2	1 石鏃	チャート	13.71	13.26	4.75	0.61		
	10	30U - 72	2 石鏃	黒曜石	14.20	12.58	2.99	0.29		
	第11図	1	(10) SK002	1 石鏃	チャート	18.95	16.24	3.20	0.82	
	第16図	11	T3	2 石鏃	チャート	19.50	16.87	3.80	0.64	
12		34Y - 84	3 石鏃	黒曜石	14.88	11.95	3.48	0.50	未製品	
第11図	4	(10) SK001	9 石鏃	チャート	16.34	10.34	4.38	0.58	未製品	
第16図	13	T54	1 敲石	変成岩	103.38	33.40	18.08	80.06		
第10図	1	(12) SK006	3 敲石	砂岩	103.24	71.22	32.18	330.50	被熱	
第16図	14	32Q - 71	5 磨製石斧	絹雲母片岩	100.67	46.49	32.10	205.71		
	15	T18	1 磨製石斧	砂岩	34.28	46.86	19.85	43.47		
	16	30U - 60	2 石皿	絹雲母片岩	183.38	147.42	72.63	2500.84	被熱	
	17	表採	7 石皿	安山岩	109.15	89.39	48.35	380.80	被熱	
	18	表採	7 磨石	安山岩	99.53	86.58	57.21	430.50	被熱	

さな凹みが設けられる。両者とも被熱し、特に16の器表面は剥落が著しい。18は安山岩製の磨石である。全面にわたり研磨され、器表面は平滑である。

4. 奈良・平安時代土師器（第17図、図版8）

奈良・平安時代の土師器が31Q - 48グリッドから集中して出土した。

1・2は坏である。1の底部には回転糸切りの痕跡が明瞭にみられ、外面底部付近は回転ヘラケズリにより調整される。口径13.7cm、底径6.4cm、器高4.5cmを測る。2の内面はヘラミガキが密に施される。口径14.6cm、底径7.3cm、器高4.9cmを測る。3・4は高台付碗である。両者共に内面はヘラミガキが密に施される。3の底径は6.6cmを測る。5は鉢である。外面は縦位のヘラケズリ調整である。6は小型甕である。胴部外面は縦位のヘラケズリ、内面はヘラナデ、口縁部はヨコナデにより調整される。推定口径15.7cmを測る。



第17図 グリッド出土土師器



第 18 図 グリッド出土銭貨

第 8 表 大割遺跡出土銭貨計測表

挿図 番号	遺跡名	出土位置	遺物 番号	銭貨名	書体	初鑄年		計測値 (mm)						重量 (g)	備 考
						中国・ 和暦	西暦	縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁厚	肌厚		
第 18 図 1	大割 (4)	表採	8	寛永通寶	真書	元文 2	1737	22.97	18.95	8.32	6.42	1.21	0.86	2.5	新寛永銭 江戸葛飾郡亀戸村鑄造推定 (亀戸銭) か？
2	大割 (9)	57 トレンチ	1	(銭文不明)	-	-	-	(22.98)	(17.11)	(9.31)	(5.69)	(0.91)	(0.82)	(1.0)	ほぼ 1/2 遺存 (数字) は遺存部での計測値
3	大割 (15)	30Y	-	景祐元寶	真書	景祐元	1034	24.72	19.91	7.41	5.98	1.00	0.80	2.3	北宋銭

5. 銭貨 (第 18 図、第 8 表、図版 8)

銭貨が 3 点出土した。1 は寛永通寶、3 は北宋銭の景祐元寶、2 は錆による腐食が著しいため銭文は不明である。

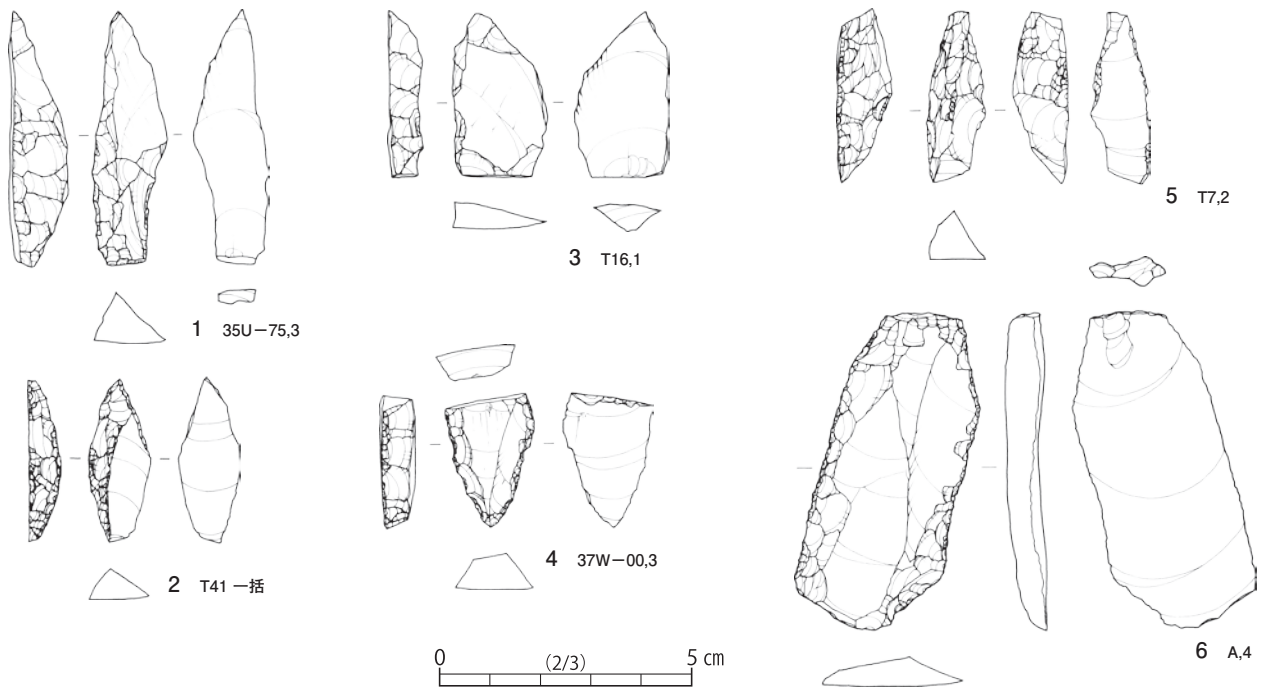
6. 旧石器時代石器 (第 19 図、第 9 表、図版 8)

大割遺跡の旧石器時代石器群については、既刊の調査報告書で報告されているが、縄文時代以降の遺構・遺物の整理作業時に、旧石器時代石器が数点未報告のまま混在していることが判明した。石器群を形成せず、いずれも単独出土であるが、補足資料として本編で紹介する。

1～4 はナイフ形石器である。1 は縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面が遺存する。調整は素材剥片の背面側にのみ施される。2 は縦長剥片の打面側を先端部とし、打面は調整により除去される。片側縁に微細な調整を施す。右側縁の先端部付近には刃こぼれ状の微細な剥離が認められる。3 は素材剥片の末端部側を先端部に設定し、両側縁に調整を施している。素材剥片の打面は無調整である。4 は中央部で欠損し、基部側のみ遺存する。調整は両側縁に対し素材剥片の腹面側からのみ施される。

5 は頁岩製の角錘状石器である。部厚な縦長剥片を素材とし、腹面側からの急角度の調整が施されるため、断面形状は二等辺三角形となる。

6 は頁岩製の削器である。同一もしくは同方向に位置する打面から連続的に作出された縦長剥片を素材とする。素材剥片の両側縁に対し密に調整を施し刃部を作出している。



第19図 グリッド出土旧石器時代石器

第9表 大割遺跡旧石器時代石器属性表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	器種	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備考
第19図	1	35U-75	3 ナイフ形石器	珧質頁岩	51.24	14.98	12.25	6.79	
	2	T41	一括 ナイフ形石器	チャート	32.68	12.85	6.86	1.99	
	3	T16	1 ナイフ形石器	珧質頁岩	33.32	19.62	7.06	4.41	
	4	37W-00	3 ナイフ形石器	黒曜石	26.74	17.85	6.86	3.26	
	5	T7	2 角錘状石器	頁岩	34.65	12.89	16.35	3.89	
	6	A4	削器	頁岩	63.95	37.41	7.85	16.47	

第3章 農協前遺跡

第1節 調査の概要（第20図、図版9）

農協前遺跡は、地金堀上流の左岸にある標高20mの台地上及びそこからわずかに西に下る緩斜面に立地する。平成14年度に6,730㎡を対象に確認調査を実施したところ、わずかに1か所ではあるが調査範囲の北寄りに設定した3トレンチで竪穴住居跡の一部を検出した。周囲を拡張してその全容を精査・記録化し、確認調査の段階で上層調査の一切を終了した。以下、遺構及び主な出土遺物について報告する。

第2節 遺構と出土遺物

1. 竪穴住居跡

SI001（第21・22図、図版9・10）

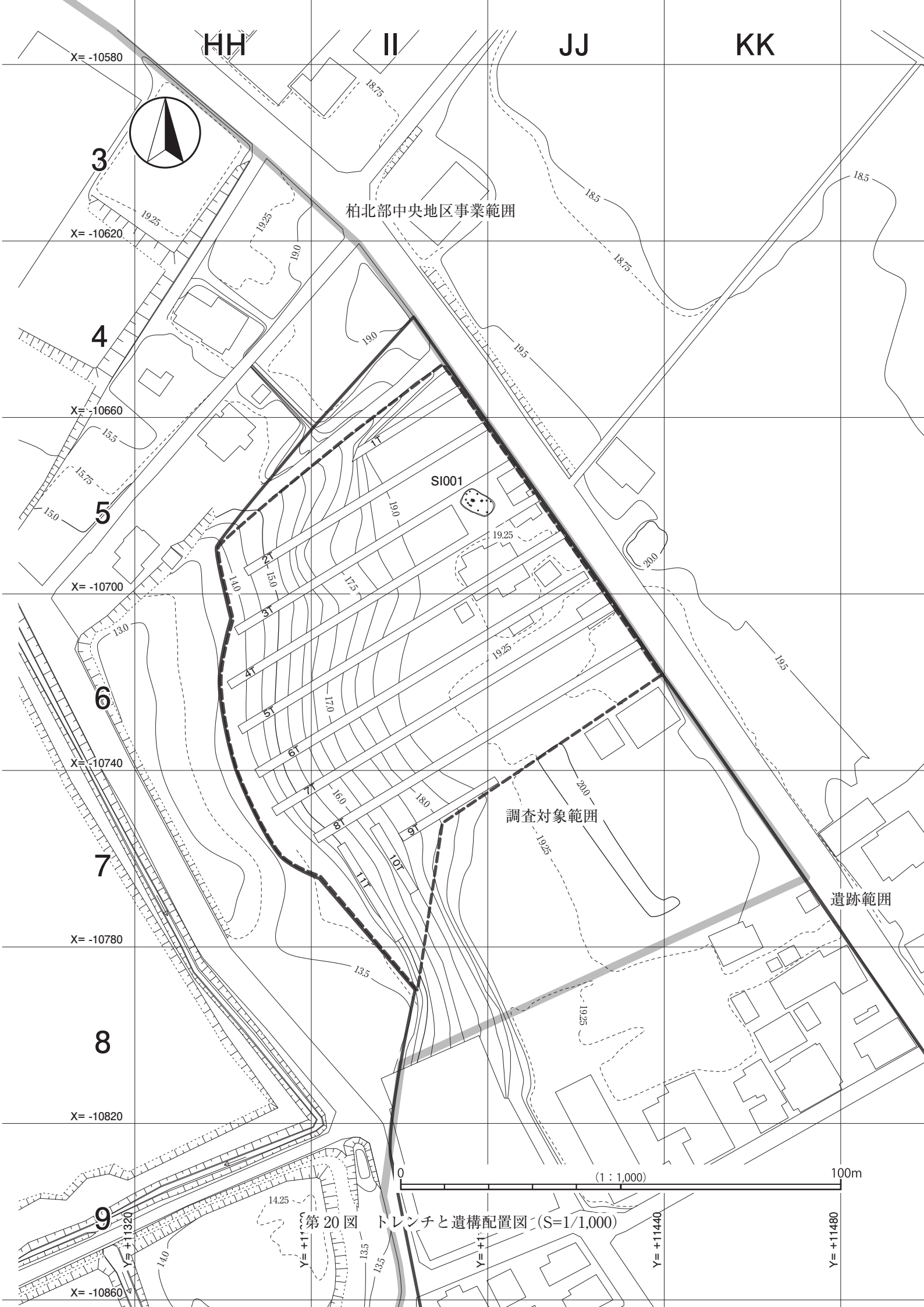
台地上の平坦面に位置する5II-49・59グリッド付近から検出された。本遺跡で検出された唯一の遺構で、縄文時代前期の竪穴住居跡である。検出されたプランは長軸7.64m×短軸4.96mを測る隅円長方形を呈し、長軸方位はN-61°-Wである。断面を観察すると、覆土は上位に暗褐色土、下位には褐色土がほぼ水平に堆積する。壁はやや傾斜を持って底面に至り、最も深い部分で検出面からの深さ38cmを測る。床面には炉が1基とピットが12か所検出された。周溝は認められなかった。

炉は床面の中央北西寄りに偏在し、長径92cm×短径60cmを測る不整楕円形を呈する。長軸方位はN-83°-Wと住居の長軸方位よりさらに西に偏る。床面からの掘りこみは11cm程度と浅く、よく焼けて硬化した部分が盛り上がるように残っていたため底面は凸凹している。炉の覆土は暗褐色土で、5mm～20mmの焼土ブロック、焼土粒、ローム粒を含む。

12か所のピットは床面上に不規則に散在する。傾向としては、炉に近い北西側の床面に多く、南東側には少ない。径の小さいものが多いのに加え、深さも46cmを測るP4及び38cmを測るP7・P12を除くといずれも30cm未満と浅いため、支柱穴は特定できなかった。

遺物は200点以上が出土している。確認調査時の他のトレンチから出土した少量の遺物量と比較すると、本住居跡の周辺には分布が集中している感がある。ほとんどが遺構検出面から覆土中位の出土で、平面的にはプラン全体に万遍なく分布している。土器の時期は、縄文時代前期中葉・黒浜式土器の破片が大部分で、前期前葉・関山式土器及び中期中葉・阿玉台式土器、同後葉・加曾利E式土器がわずかに含まれている。石器2点、土製品2点を含む38点を図化した。

1は最も多くの破片が接合・復元された深鉢である。おもに炉と住居跡北西側の壁との間から出土した。口唇上面が沈線状に凹む緩やかな波状の口縁部を持ち、やや括れた頸部を除いて無節縄文がほぼ全面に施される。2は推定口径17.5cmを測る小型の深鉢である。口縁は緩い波状を呈す。不明瞭だが、地文は附加条2種と思われる。3は遺存部最大径22.4cmを測る深鉢の胴部片である。地文は附加条1種である。4～11は深鉢の底部片である。形状が分かるものには、中央が上げ底状になっているものが多い。特に11は縁が突出して高台状を呈している。地文は単節縄文(6)、附加条1種(5・7～9)・2種(4・11)・軸条不明(10)があり、附加条も2本(4・5・8・10)、3本(11)、4本(7・9)が認められる。



柏北部中央地区事業範囲

調査対象範囲

遺跡範囲

0 (1:1,000) 100m

第20図 トレンチと遺構配置図 (S=1/1,000)

X = -10580

X = -10620

X = -10660

X = -10700

X = -10740

X = -10780

X = -10820

X = -10860

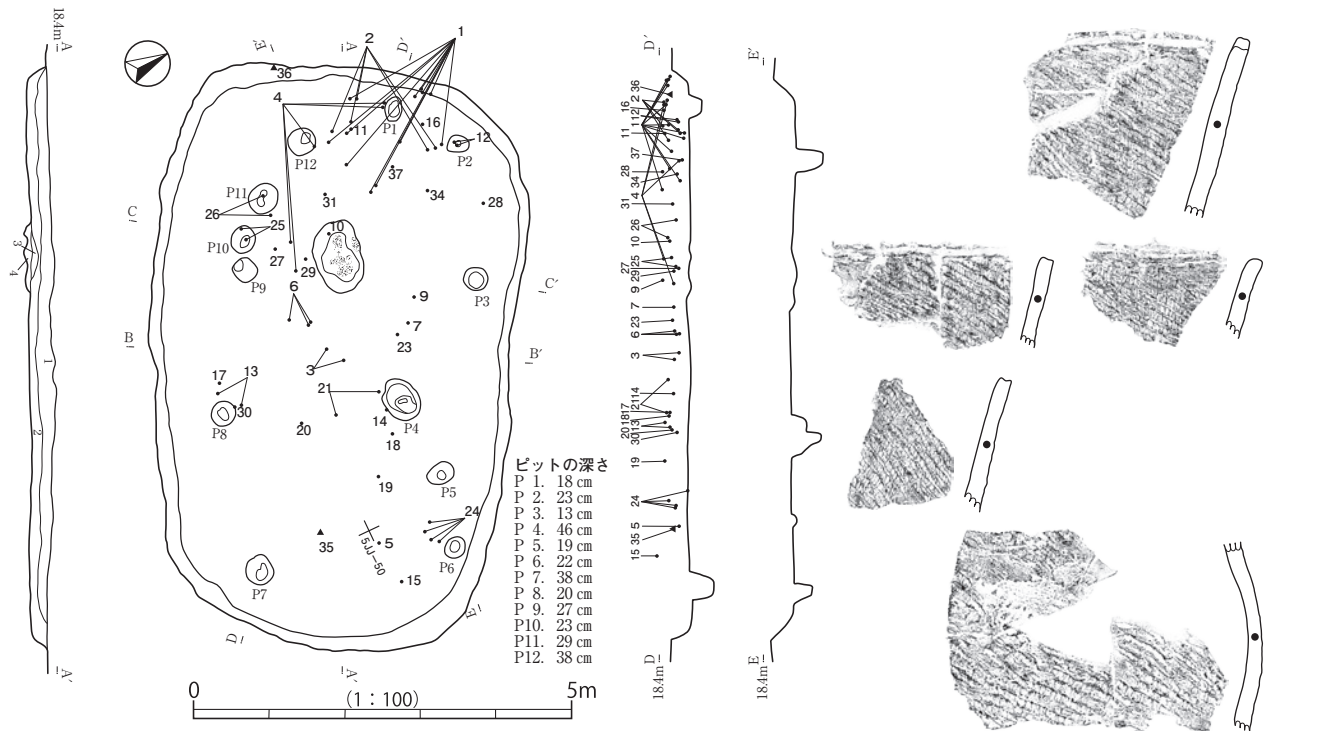
Y = +11320

Y = +11350

Y = +11400

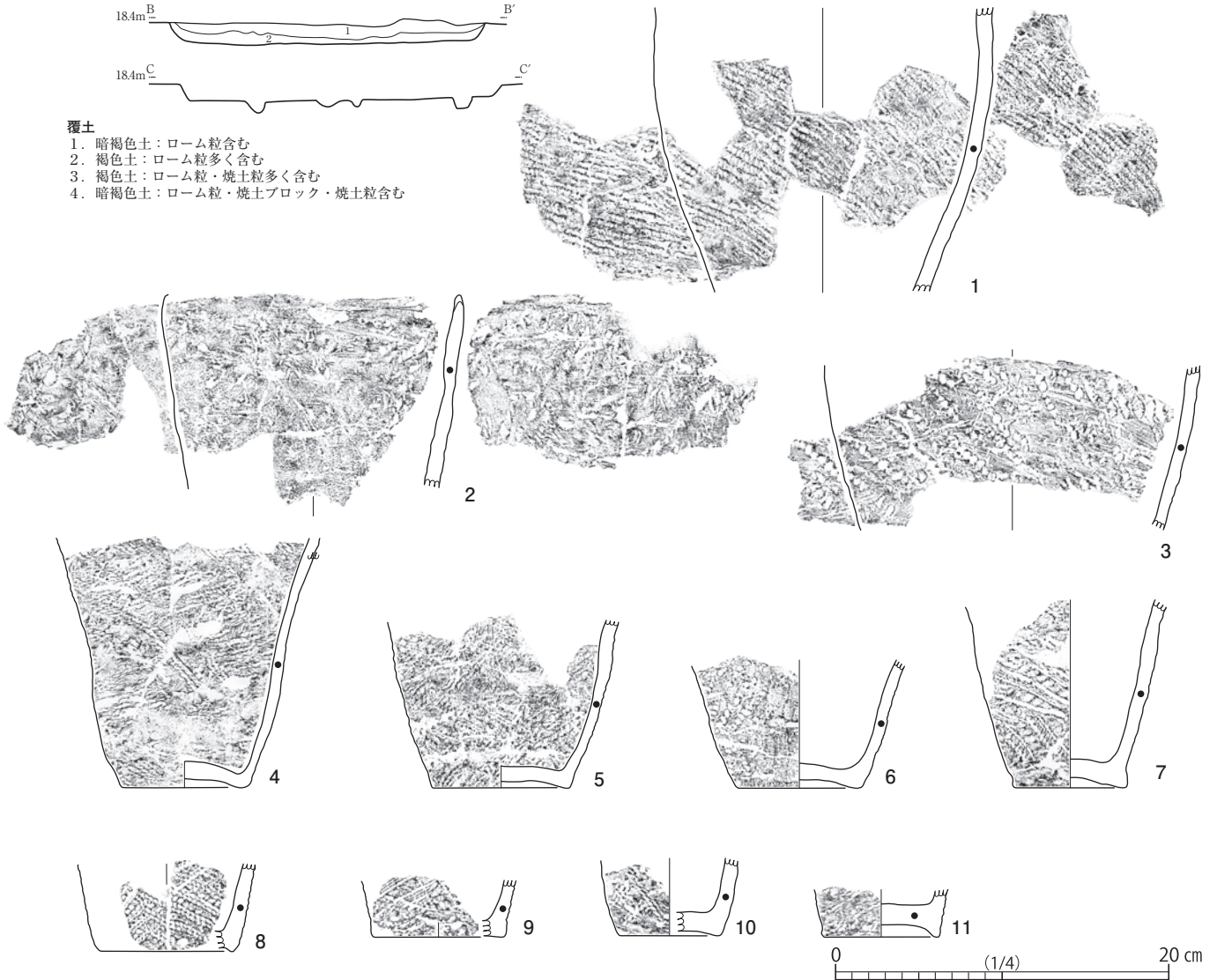
Y = +11440

Y = +11480

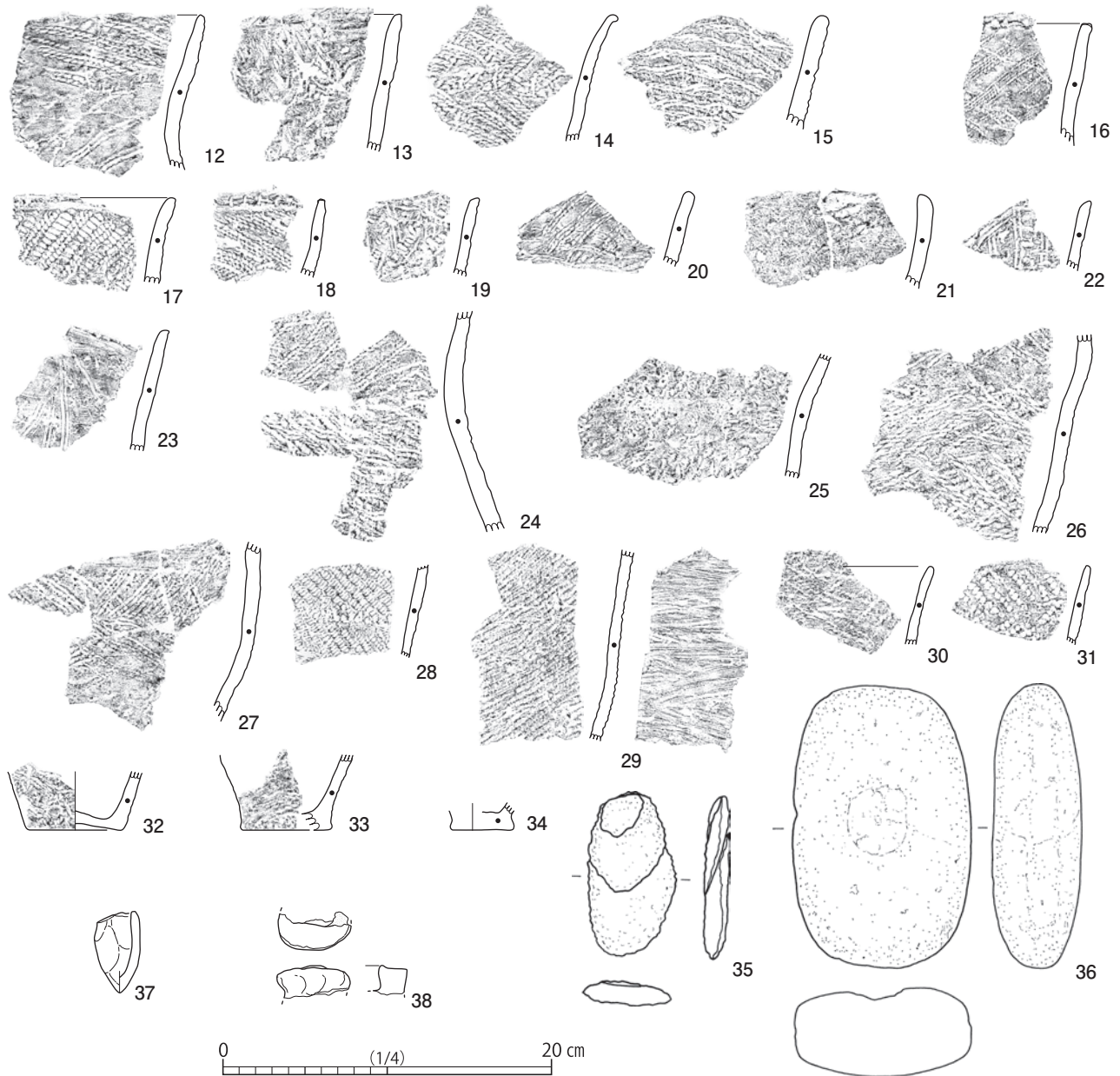


覆土

1. 暗褐色土：ローム粒含む
2. 褐色土：ローム粒多く含む
3. 褐色土：ローム粒・焼土粒多く含む
4. 暗褐色土：ローム粒・焼土ブロック・焼土粒含む



第21図 SI001 (1)



第22図 SI001(2)

12～23は口縁部片である。口縁部には平縁(12・13・16・17)と波状縁(14・15・18～23)があり、口唇部は大きく外反するもの(14)、口唇上面が平坦でやや内傾するもの(13・15・17・19・22・23)、平坦で刺突を持つもの(16・18)がある。口縁部と胴部で原体・施文法を変え、口縁部文様帯を意識したもの(12・14・16・18・20)、口縁部に沿って細い無文部の巡るもの(17)、地文は附加条縄文のほかに、無節縄文(21)、条痕文を併せ持つもの(13・19・22・23)とバラエティに富む。

24～29は地文のみが見える胴部片である。地文には附加条(24～27)と単節縄文(28)、無節縄文(29)が見える。29の内面には横位の条痕文が密に施されている。28・29は前期前葉の関山式と思われる。

30～34はミニチュア土器と思われるものを集めた。30・31は口縁部片である。30は口唇上面が沈線状に凹む平縁で、地文は附加条2種である。31は緩やかな波状縁で、単節縄文による羽状縄文が施される。

30・31とも口径は8.6cmと推定した。32～34は底部片である。32は上げ底状で底径5.8cm、33・34は突出気味の平底で、底径はそれぞれ推定5.4cm、3.8cmを測る。

35・36は石器である。35はホルンフェルス製の小型の打製石斧である。住居跡中央東寄りの覆土中から出土した。最大長6.6cm、重量26.78gを測る。36は安山岩製の凹石である。北東壁際の覆土中から出土した。最大長11.6cm、重量500gを測る。2点とも表面の風化が著しい。

37・38は土製品と思われるものである。37は尖底土器を模したミニチュア土器のような土製品である。炉と住居跡北西側の壁との間の覆土中から出土した。完形で、口径1.7cm、器高3.7cm、重量7.92gを測る。表面は手捏ね状の成形痕と思われる凹凸が残るのに対し、内面は比較的滑らかである。直径1cm程度のやや先細りの棒状のものの周りに粘土を貼り付けて成形した後、抜き取ったような製作技法が見て取れる。胎土に繊維は含まれない。縄文時代早期の遺物は、本住居跡はおろか本遺跡からも1点も出土していないため、遺物の種類・帰属等判断が難しい。38は土器の口縁に付く突起あるいは小把手のような土製品である。住居跡南西側の覆土一括出土品に含まれていた。手捏ね状の襷状の成形痕が正面とした面に見える。胎土に植物繊維は含まれない。

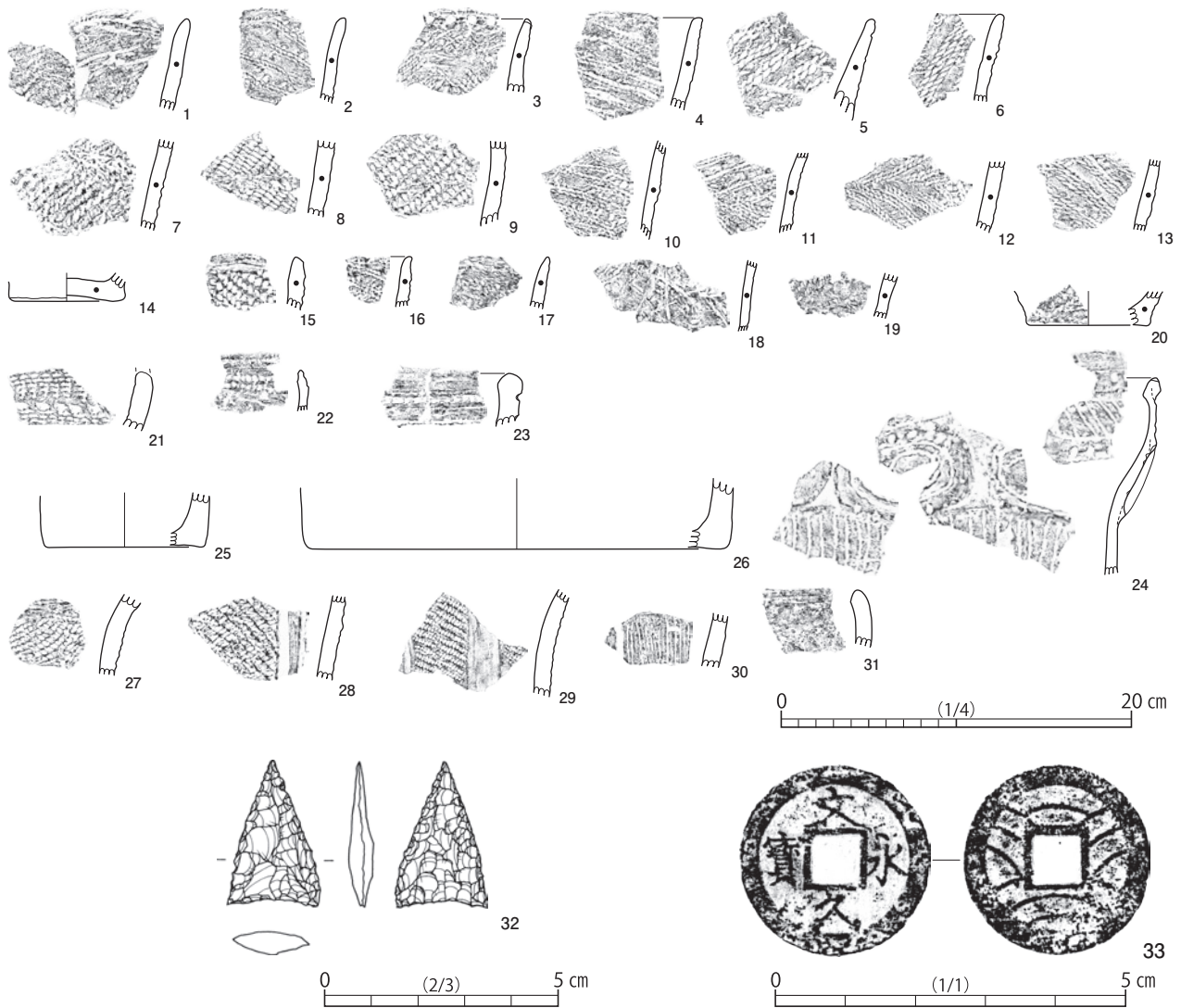
遺構の形状等の特徴と土器の出土量から、縄文時代前期中葉・黒浜式期の竪穴住居跡と判断する。

第3節 トレンチ及びグリッド出土の遺物

1. 縄文土器（第23図、図版10）

確認調査時の1～8トレンチ及びSI001検出の際に拡張した周辺のグリッドから縄文土器が出土した。出土した土器は量的には多くないが、縄文土器以外の土器は1点も含まず、時期的には前期前葉から中期後半に集約される。33点を図化した。なお、9～11トレンチからは遺物は1点も検出されなかった。

1～20は前期中葉の黒浜式土器である。いずれも胎土に植物繊維を含む。1～6は口縁部片である。口縁には波状口縁（1・2・5）と平縁（3・4・6）があり、口唇上には規則的に刺突が加えられたものの（3）、沈線状の凹みを持つもの（1・4～6）、平坦なもの（2）が混在する。施文された原体はいずれも附加条縄文で、附加条1種（1・2）・2種（3）・軸条不明（4～6）があり、附加条も1本（1）、2本（2・4・5）、3本（6）、4本（3）が認められる。7～13は地文のみ見える胴部片である。地文には無節（7）、単節（8・9）、附加条（10～13）があり、羽状構成の見える破片（11・12）も含まれる。14は底部片である。遺存部に文様は見えない。底部中央がやや上げ底状になる。15～20はミニチュア土器と思われる。15～17は口縁部片、18・19は胴部片、20は底部片である。15には同一個体の小破片がもう1点ある。21は放射肋を持つ貝殻の腹縁部で施文した波状貝殻文を持つ。破片上端面は粘土紐の輪積接合面で剥がれている。前期後半の興津式土器である。22は前期末葉のミニチュア土器の口縁部片と思われる。23～26は中期中葉の阿玉台式土器である。24は不規則な刺突を持つ隆帯によって2段の窓枠状区画が構成され、区画内に結節沈線による平行斜行沈線文、渦巻文等が充填される。胴部は平行する縦位の結節沈線文が施される。図示したほかにも、直接接合しないものの同一個体と思われる小破片が3点ある。23は平行する2列の角押文が巡る口縁部片である。25・26は底部片である。遺存部に文様は見られない。径5mm前後のあばた状の剥落が、器表面及び底部外面に多く見られる。27～31は中期後半の加曾利E式土器である。27～30は深鉢の胴部片である。27～29の地文は単節縄文で、27は地文のみ、28は沈線間を磨消した垂下する2本の沈線が、29は浅い沈線で区画された磨消懸垂帯が見える。30の地文は



第23図 グリッド出土遺物

第10表 農協前遺跡出土銭貨計測表

挿図 番号	遺跡名	出土位置	遺物 番号	銭貨名	書体	初鑄年		計測値 (mm)						重量 (g)	備考
						中国 和暦	西暦	縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁厚	肌厚		
第23図33	農協前	1トレンチ	1	文久永寶	真文	文久3	1863	26.84	21.31	8.86	6.84	1.13	0.54	2.7	真文(若年寄・小笠原長行の筆) 江戸深川千田新田(大工町)鑄造

櫛歯状工具による条線で、逆U字状を形成すると思われる垂下する沈線が見える。31は浅鉢の口縁部片である。遺存部に文様は見られない。口縁部内面に稜を持つ。

2. 縄文時代石器 (第23図、図版10)

調査範囲の北寄りに設定した3トレンチから、チャート製の凹基無茎鏃が1点出土した。最大長31mm、重量2.19gを測る。

3. 銭貨 (第23図、第10表、図版10)

調査範囲の最も北寄りに設定した1トレンチから、江戸時代末期の銅銭である文久永寶(初鑄年1863年)が1点出土した。

第4章 まとめ

第1節 大割遺跡

第2章では大割遺跡から検出された遺構・遺物について記述を行ったが、ここでは特にトレンチ及びグリッドから出土した縄文土器について考察をしたい。

大割遺跡から出土した縄文土器は早期から晩期まで多期にわたり、時期により出土量に多寡の差はあるがおおよそ次のように分類が可能である。

第1群 早期

1類 撚糸文系土器

2類 条痕文系土器

第2群 前期

1類 羽状縄文系土器

2類 貝殻文系土器

第3群 中期

1類 中期初頭の土器（下小野式土器）

2類 阿玉台式土器

3類 加曾利E式土器

第4群 後期

1類 加曾利B式土器

第5群 晩期

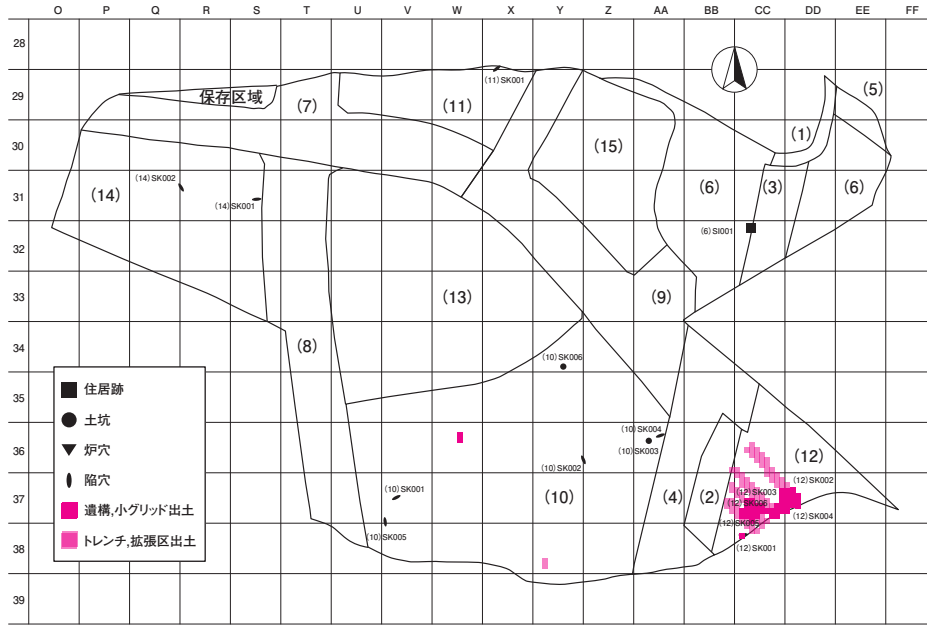
1類 千網式土器

第24・25図は上記の分類に則して、それぞれの時期による出土位置を提示したものである。ただし、第2群2類貝殻文系土器のように、小破片等の理由により実測図・拓影図を掲載していないものもある。また、第3群については出土地点が広範囲にわたるため、3類加曾利E式土器を独立させて掲載した。色調の違いは出土量の違いではなく、色調の濃いものは遺構・小グリッドから出土した、いわばピン・ポイントに近いことを示す。

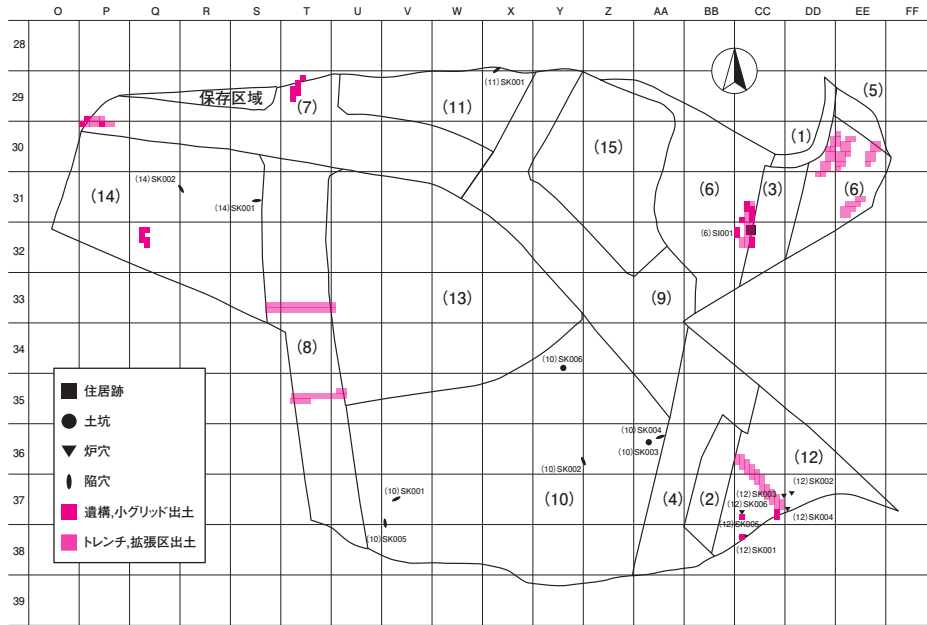
第1群1類は36Wグリッド1か所からの出土である。2類は調査区南東に集中する炉穴群から出土した個体が多いため、この地点に色の濃い分布が見られるのは当然だが、逆にいうと2類に属する遺構・遺物は地点が極めて限定されることがわかる。この付近は地金堀から分岐する小支谷に面した緩斜面であり、遺構・遺物の集中は地形的な要因が大きいと考えられる。

第2群1類はこの期に属する（6）SI001周辺に集中が認められ、また調査区北東部の30EEグリッド付近、北西部の29Tグリッド、30Pグリッド付近にも集中する傾向がある。この地点は前述した小支谷とは異なる別の小支谷の開口部と最奥部にあたる。

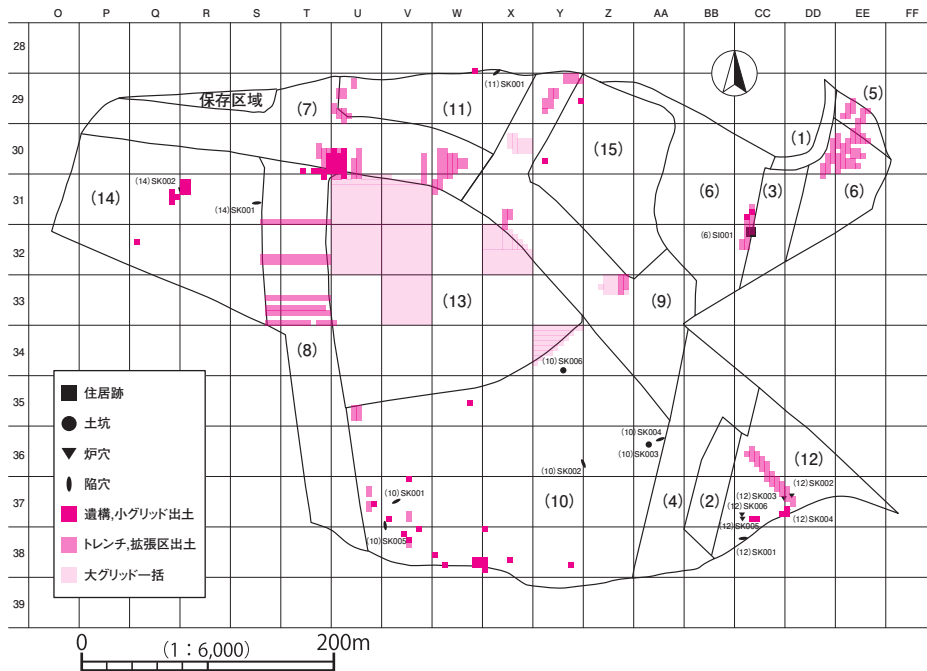
早期
 燃糸文系
 条痕文系



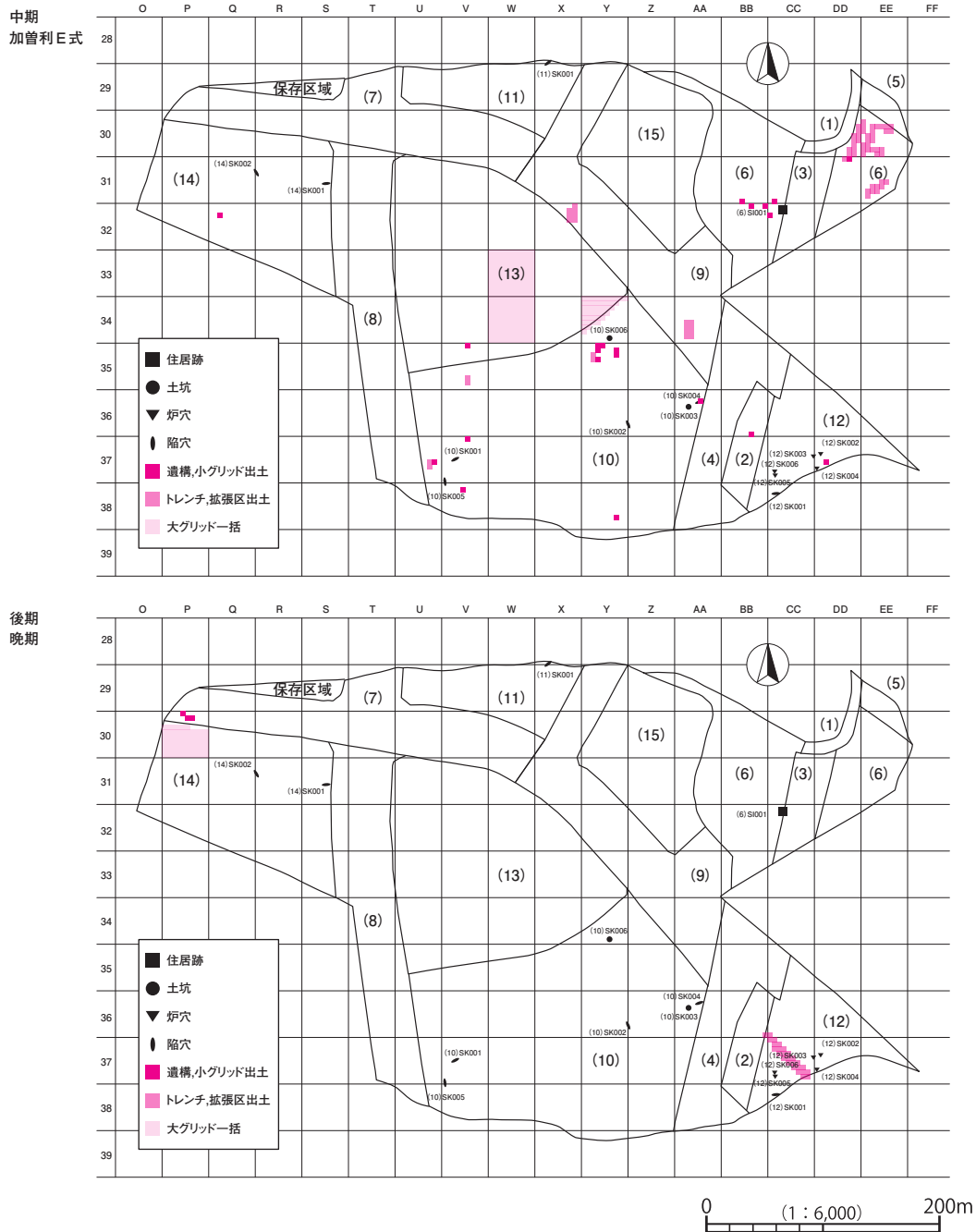
前期
 羽状縄文系
 貝殻文系



中期
 初頭
 阿玉台式



第 24 図 時期分類による出土位置 (1)



第25図 時期分類による出土位置(2)

第3群では遺跡範囲全体に分布が拡散するが、新たに南北の小支谷に挟まれた台地中央部に集中地点が認められることが特徴的である。また遺跡南側の小支谷最深部に面した緩斜面部に出土する傾向が認められ、第2群までは見られなかった、陥穴の分布に重なるような土器の分布も特筆されよう。

第4・5群は出土点数的に少数であるが、第4群は遺跡北側の小支谷の最奥部に、第5群は遺跡南側の小支谷開口部に分布が認められる。

各時期の分布について特徴を述べたが、土器の分布に時期的な差が認められるものの、各時期共通して遺跡北側、南側に位置する小支谷の最奥部と開口部に集中する傾向が認められる。特に南側の小支谷開口部については、この付近の地形的な要素が、大割遺跡の縄文時代の生活に大きな影響を与えていたことが強く窺える。

第2節 農協前遺跡

今回の農協前遺跡の調査では、縄文時代前期中葉の黒浜式に所属する竪穴住居跡1軒の検出のみにとどまった。

調査区西側には地金堀に起因する低湿地が所在し、低地面と台地平坦部との高低差は6mを測る。竪穴住居跡はほぼ台地平坦部の最高点に位置するため、西進するとすぐに低地面まで一挙に下る急斜面となる。逆に北東側には利根川から進入する谷が存在し、県道を挟んで緩やかな傾斜が谷に向かい続く地形である。このため県道が馬の背状に延びる台地の分水嶺にあたり、かつ農協前遺跡が属する手賀・印旛沼湾奥部：柏・我孫子低地と古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地といった形成要因の異なる水系の境界でもある。この古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地には大規模な当該期の集落が確認されており、前述した谷の最深部に所在する大松遺跡・駒形遺跡では、200軒に及ぶ住居跡が検出されている。

農協前遺跡の北東側、県道を挟んで所在する原畑遺跡では、黒浜式に属する竪穴住居跡が19軒検出されており、いくつか小さなまとまりはあるものの、大松遺跡・駒形遺跡と比較すると遺構密度は希薄であるといえる。むろん原畑遺跡全体を網羅していないため、検出されていない遺構が存在する可能性は極めて高いが、それでも遺構密度は現状とさほど変わらないと考えられる。農協前遺跡で検出したSI001住居跡と原畑遺跡で検出した最も近距離のSI016住居跡とは130mの距離を置き、遺構分布的には隔絶した感があるが、関連性の高さ、換言すれば同一の台地上に展開する小集落の一単位を担っているといっても過言ではない。

参考文献

- (財)千葉県教育振興財団 2008年『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書1－柏市大松遺跡－ 旧石器時代編』
- (財)千葉県教育振興財団 2009年『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡－ 縄文時代以降編1』
- (財)千葉県教育振興財団 2009年『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市原山遺跡－ 旧石器時代編』
- (財)千葉県教育振興財団 2011年『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3－柏市原畑遺跡－ 縄文時代以降編1』

写 真 图 版



農協前遺跡

屋敷内遺跡

北花崎遺跡

内山遺跡

大割遺跡

須賀井遺跡

溜井台遺跡

原山遺跡

翁原遺跡

遺跡周辺空中写真 (S=約1/8,000)

図版2 大割遺跡



調査前近景 (第1次・南から)



調査前近景 (第2次・南から)



調査風景 (第4次・北西から)



調査前近景 (第8次・北から)



調査前近景 (第10次・北から)



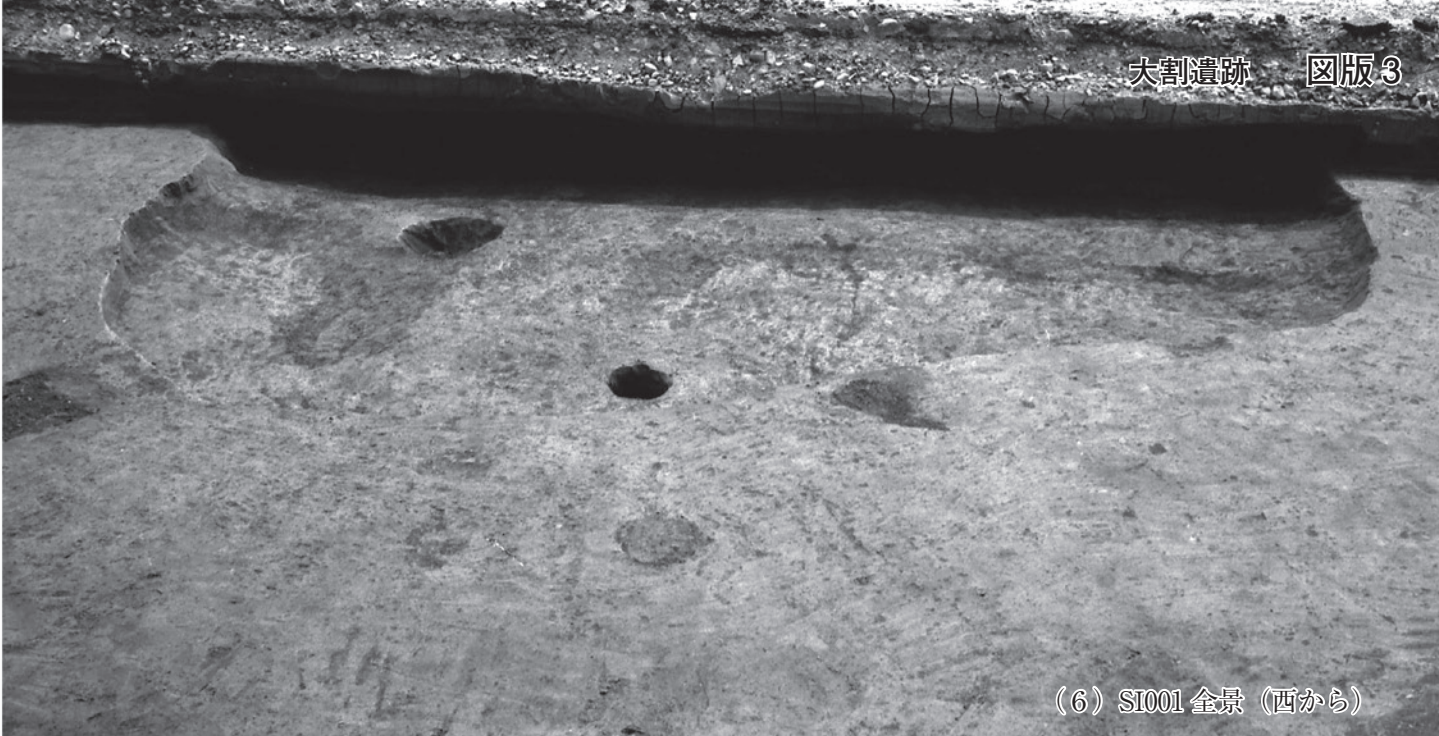
調査前近景 (第12次・北東から)



調査前近景 (第13次・南から)



調査前近景 (第15次・南東から)



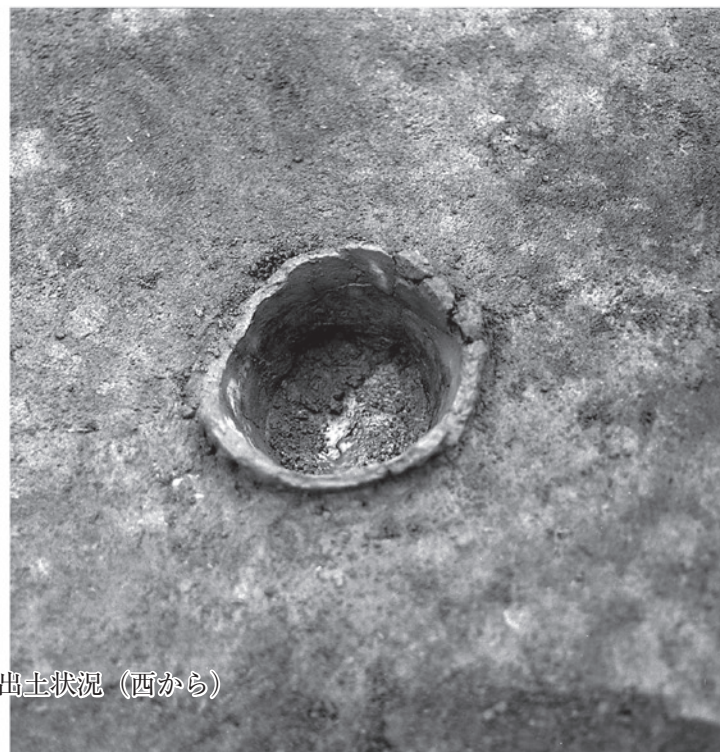
(6) SI001 全景 (西から)



(6) SI001 遺物出土状況&セクション (西から)

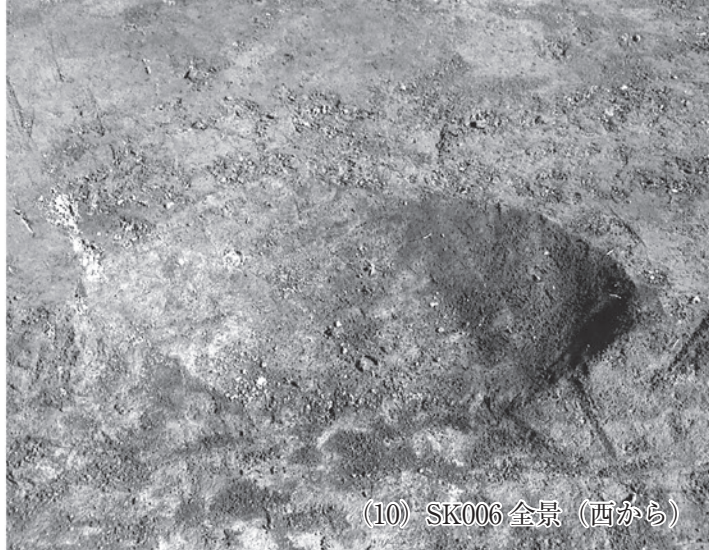


(6) SI001 遺物出土状況 (西から)





(10) SK003 全景 (南西から)



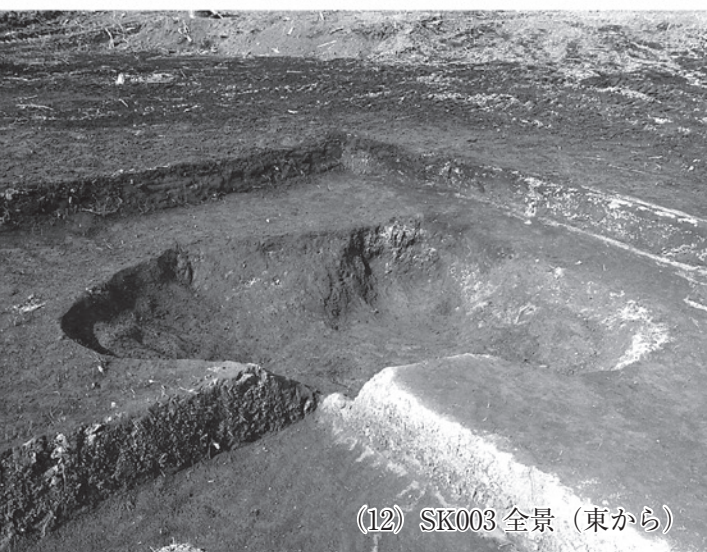
(10) SK006 全景 (西から)



(12) SK002 全景 (西から)



(12) SK004 全景&セクション (西から)



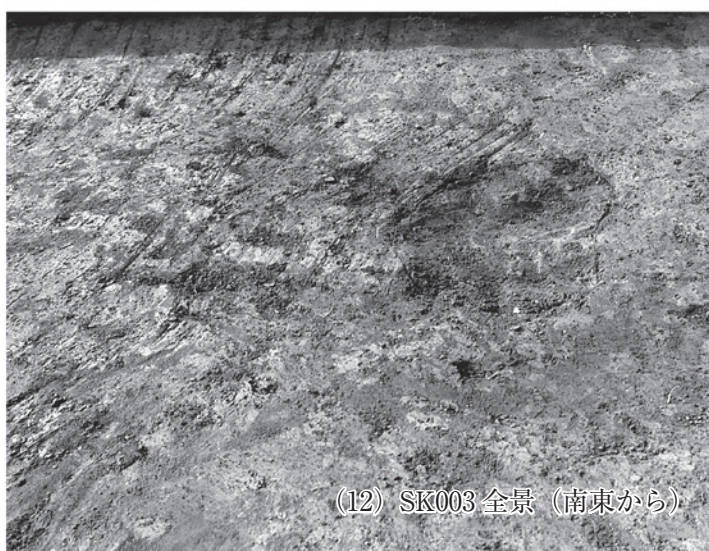
(12) SK003 全景 (東から)



(12) SK003 遺物出土状況 (南東から)



(12) SK005 全景 (東から)



(12) SK003 全景 (南東から)



(10) SK001 全景 (南西から)



(10) SK001 セクション (南西から)



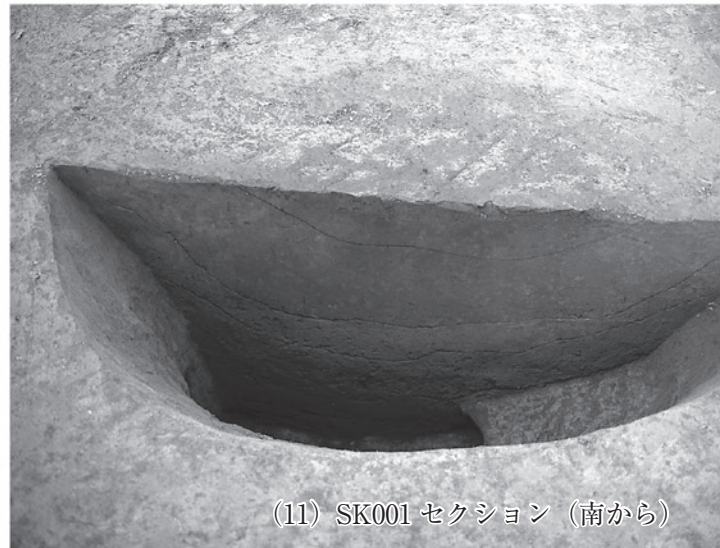
(10) SK002 全景 (南から)



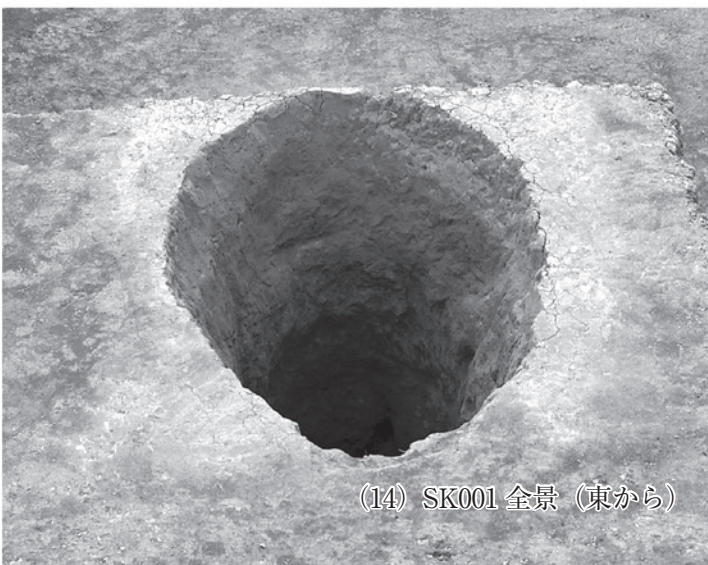
(12) SK001 全景 (西から)



(11) SK001 全景 (北から)



(11) SK001 セクション (南から)

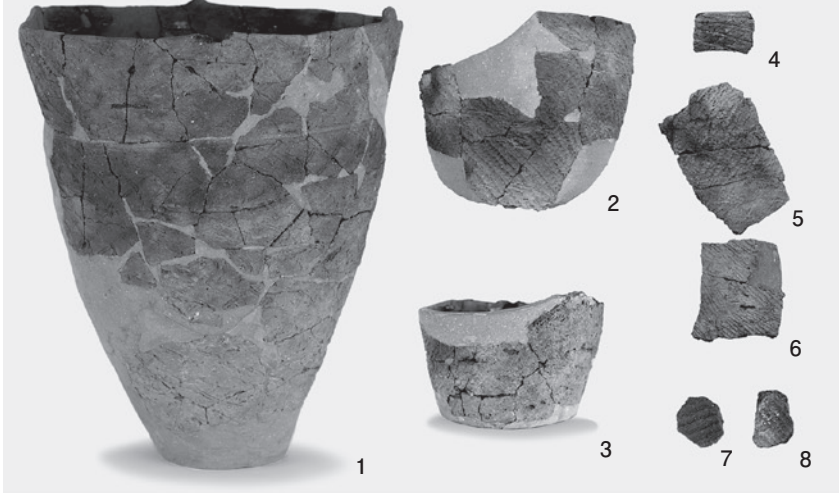


(14) SK001 全景 (東から)



(14) SK002 全景 (南から)

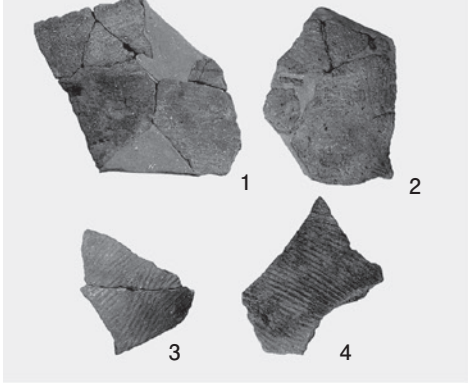
(6) SI001



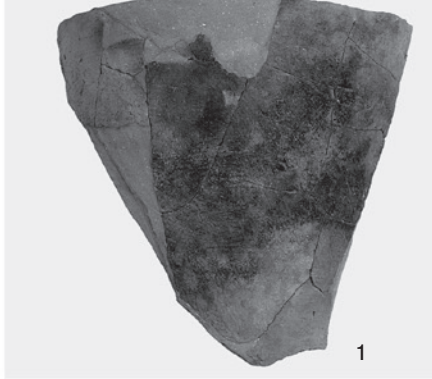
(12) SK002



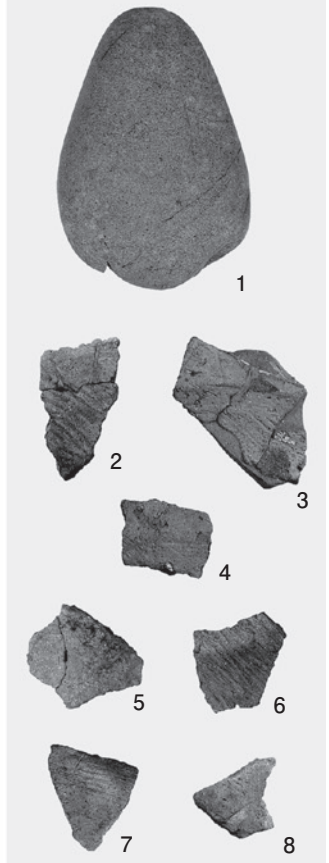
(12) SK003



(12) SK005



(12) SK006



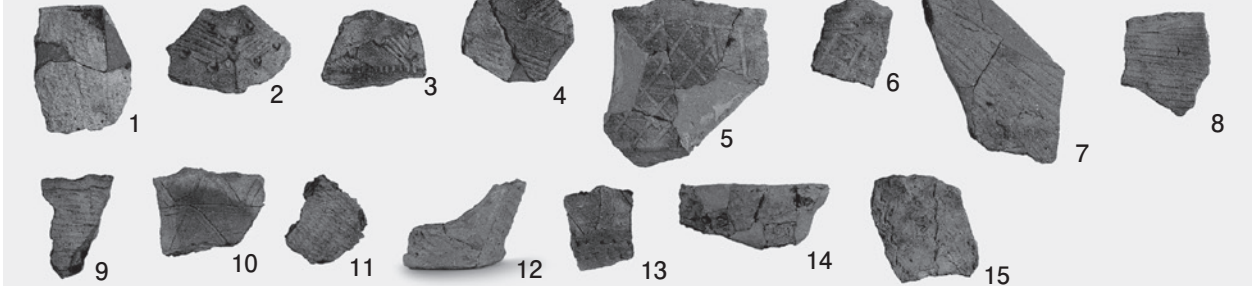
(10) SK001

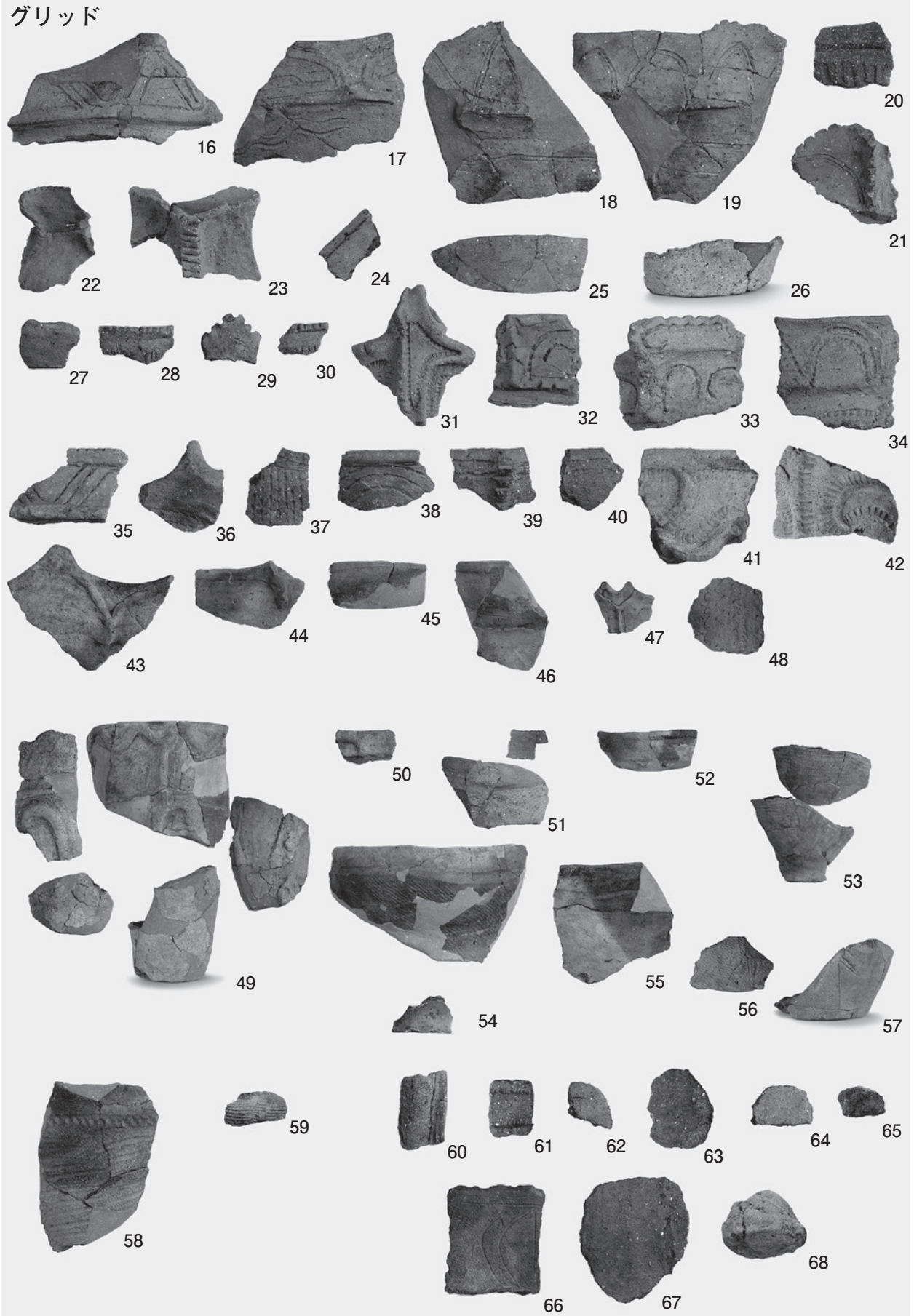


(10) SK002



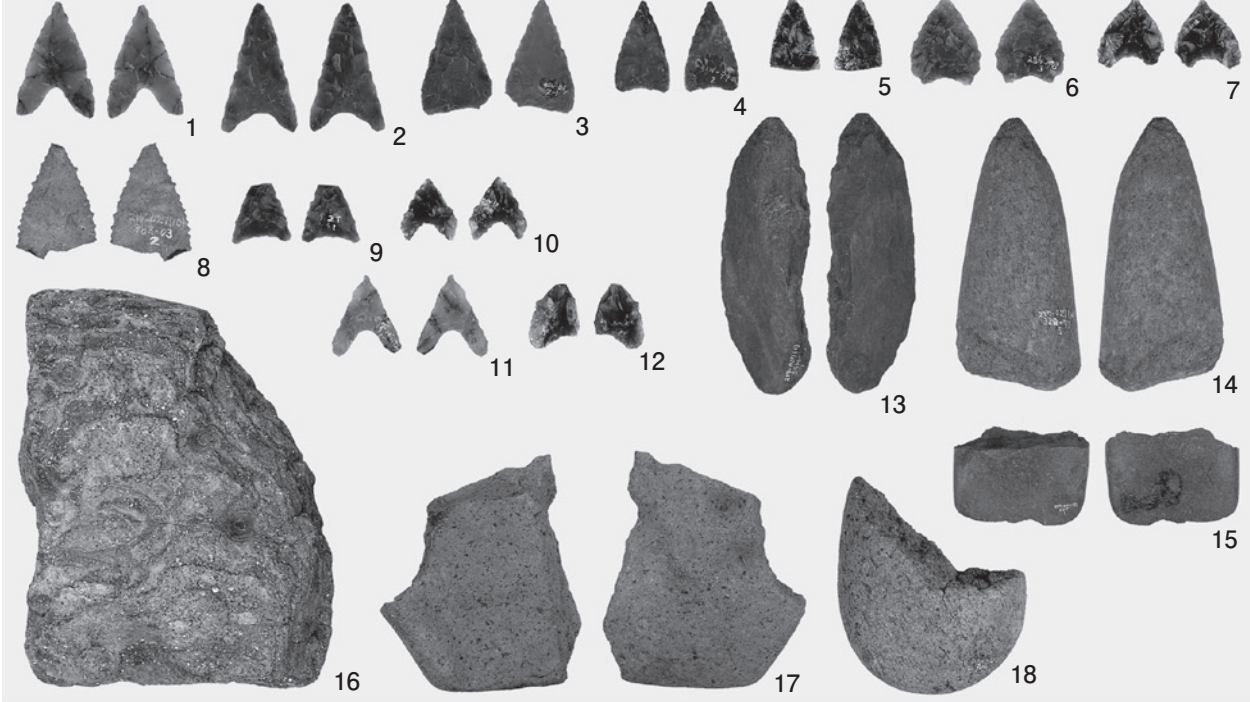
グリッド



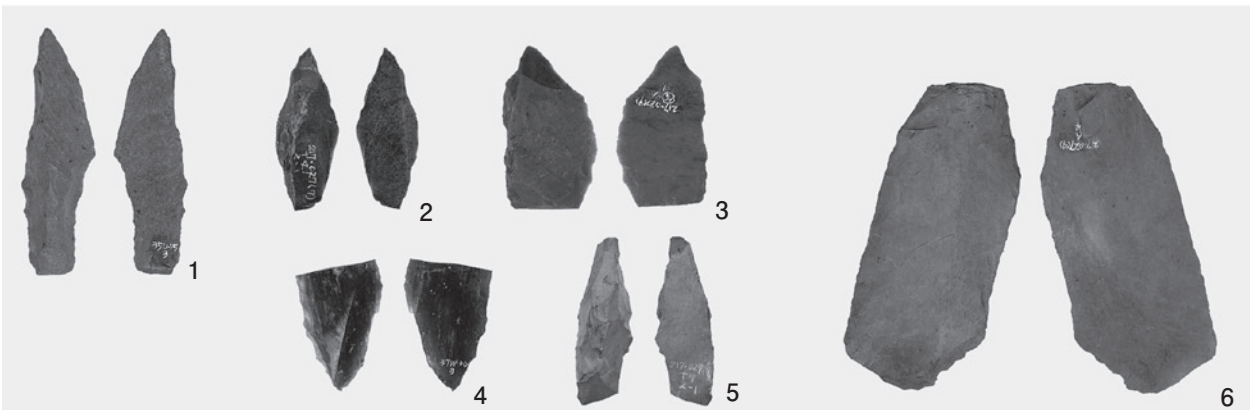
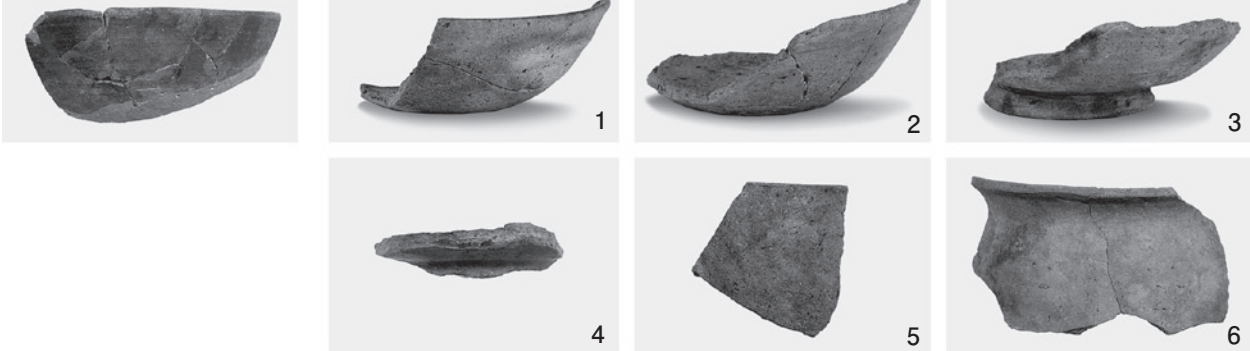


出土遺物 (2)

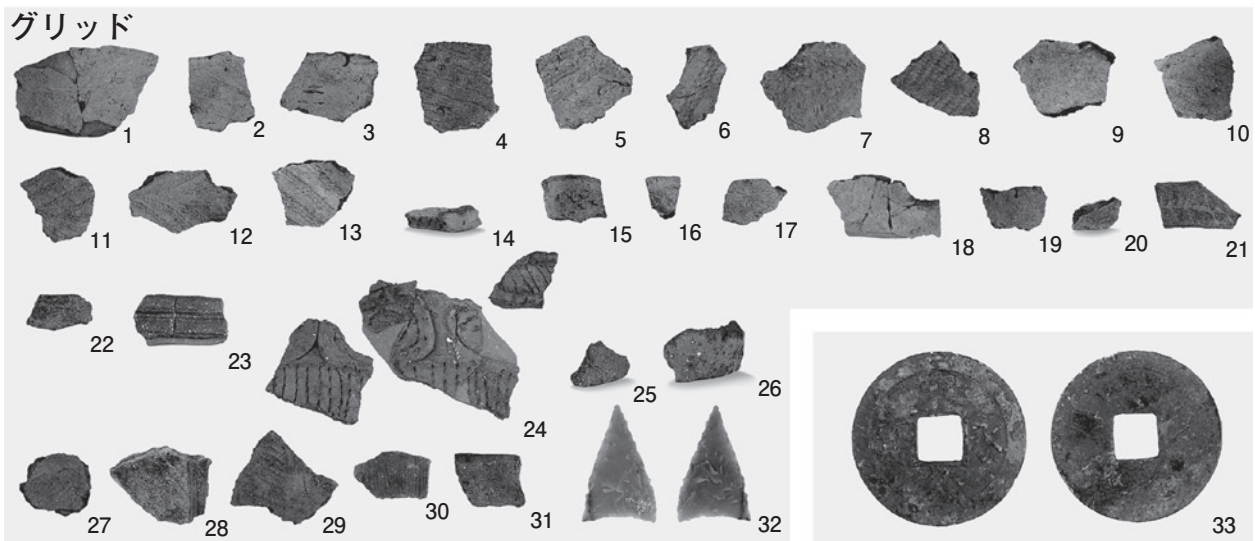
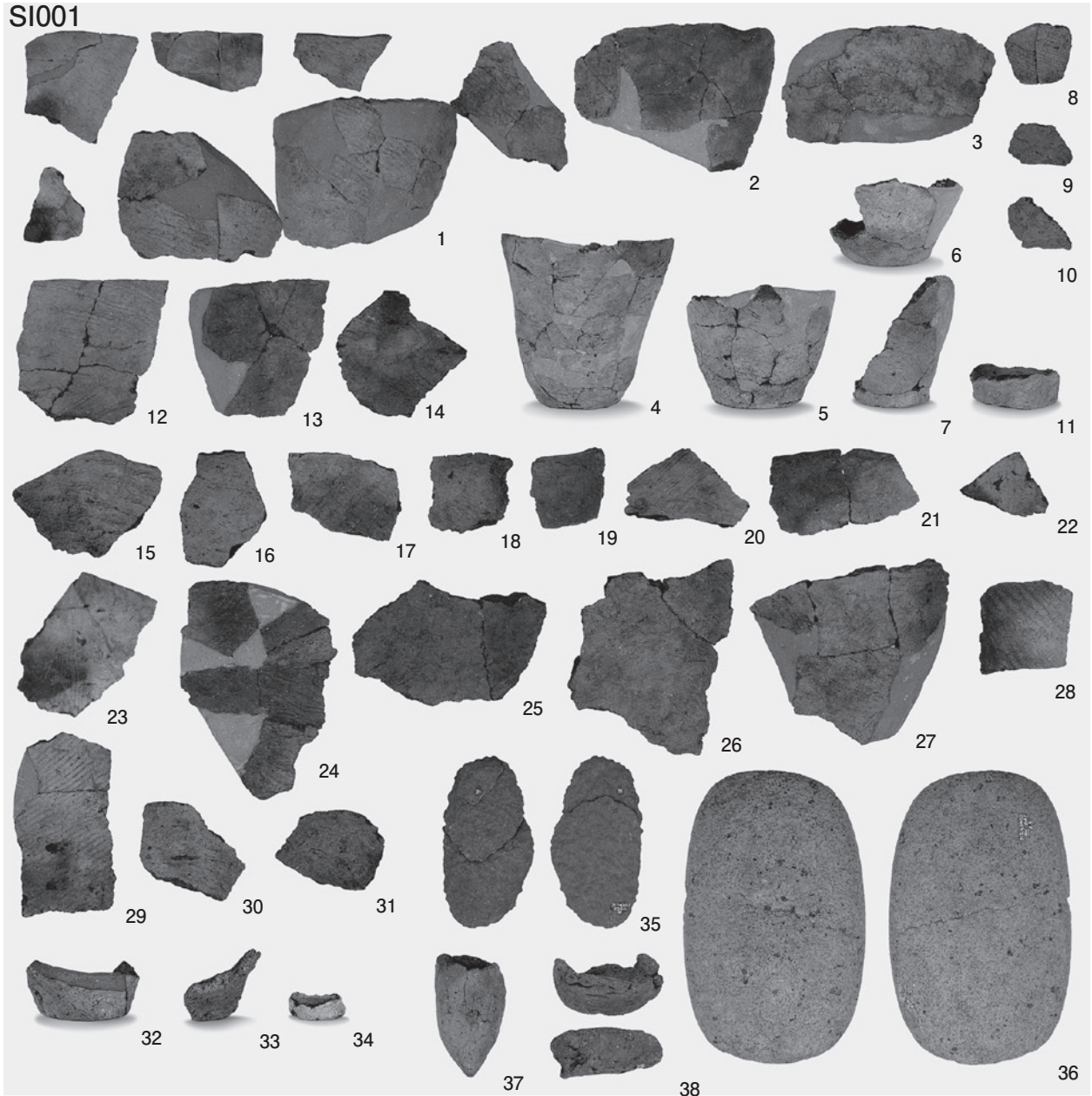
グリッド



(10) SK006







報告書抄録

ふりがな	かしわほくぶちゅうおうちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書							
巻次	6							
副書名	—柏市大割遺跡・農協前遺跡— 縄文時代以降編							
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	山田貴久・落合章雄							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町 1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2015年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおわりいせき 大割遺跡	かしわわかしばあざおおわり 柏市若柴字大割 227-1 ほか	12217	027	35度 53分 37秒	139度 57分 16秒	20010405 ～ 20070810	178,270m ²	柏北部中央地区 土地区画整理事業
のうきょうまえいせき 農協前遺跡	かしわしおおむらあざしょうれん 柏市大室字正連 じまゑ 寺前 257-11 ほか	12217	034	35度 54分 24秒	139度 57分 23秒	20020408 ～ 20020627	6,730m ²	道路建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大割遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 中・近世	竪穴住居跡 1軒 土坑 1基 炉穴 5群 11基 陥穴 8基 土坑 1基		縄文土器、石器、 土製品 土師器 銭貨			
農協前遺跡	集落跡	縄文時代 近世	竪穴住居跡 1軒		縄文土器、石器、 土製品 銭貨			
要約	柏北部中央地区土地区画整理事業に伴い実施された調査である。大割遺跡は事業予定地内の中央部に位置し、地金堀と大堀川に挟まれた台地上に、農協前遺跡は事業予定地内の北側に位置し、利根川と地金堀に挟まれた台地上に立地する。両遺跡から縄文時代前期の竪穴住居跡が1軒ずつ検出された。加えて大割遺跡から縄文時代の土坑、炉穴、陥穴、及び平安時代の土坑が広い台地上に散在して検出された。遺物は早期から中期の縄文土器及び石器、土師器、銭貨等が出土した。							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第6集

柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書6

—柏市大割遺跡・農協前遺跡—

縄文時代以降編

平成27年3月25日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉県中央区市場町1-1

印刷

株式会社みつわ

千葉県美浜区新港213-5
